

▼肘折温泉街・ひじおりの灯



湯治の里 大蔵村肘折温泉郷の 地域資源を活用した取組

大蔵村の概要

大蔵村は山形県北部、最上地方の南部に位置し、総面積は211・59㎢で、その内の85%にあたる180㎢が山林という山あいの村です。

村の南方には、出羽三山信仰で栄えてきた霊峰月山と葉山がそびえ、そこからの流水を湛え、村の中心部である清水・合海地区の美しい田園地帯を山形県の母なる大河最上川がゆつくりと流れています。

村の交通の要である国道458号が村の中央部を南北に走り、それに沿って大小27の集落が点在し、1、084世帯、約3、300人が静かに暮らしています。村の基幹産業の

山形県 大蔵村

おおくらむら



一つである農業は、稲作を中心として営まれてきましたが、近年トマトの生産も盛んとなり、県内一の生産量を誇っています。

観光業の拠点である肘折温泉郷は



▶ 4 mを超える雪壁

月山や葉山のふもとに位置し、開湯1200有余年の歴史を誇り、古くは山岳信仰とともに栄えてきました。近年は、湯治場として栄え、今でも湯治場風情を色濃く残す温泉地となっています。肘折温泉は、豪雪地帯としても知られ、平年の積雪は3m以上に達し、ときには4mを超えることから、しばしば全国ニュースでも取り上げられる日本有数の豪雪地帯です。

温泉街から15分ほど北上したところにある、豊牧、沼の台、滝の沢、平林の4地区は「四ヶ村^{しかむら}」と呼ばれ、地域にある約120haもの広大な棚田「四ヶ村の棚田」を一目見ようと、県内外から多くの人が来村しています。

過疎化や高齢化が進んでいますが、何よりも大蔵村には人々の営みの中から作り上げられてきた地域資源と後世に残したい農山村の風景があり、NPO法人「日本で最も美しい村」連合の立上げの村として活動を展開しています。

肘折温泉郷

開湯1200年以上の歴史を誇る

温泉街名物の朝市



「肘折温泉郷」は21軒の旅館が軒を連ねる、当村を代表する地域資源です。湯治場としての風情を今でも色濃く残すレトロな温泉地として、多くの方々から愛されています。

春から降雪期まで温泉街には朝市が立ち、旬の山菜や野菜、きのこ、惣菜などとともに、地元のお母さん方との会話を楽しみに訪れる方々も多く、温泉街の名物となっています。

観光スタイルの変化とともに、肘折温泉郷の観光客数は年々減少して

いますが、最近では、家族連れや若い方々、さらにインバウンドの推進により海外からの観光客も見られるようになりました。これまでのように、湯治場として長期滞在する方々は少なくなっておりますが、肘折温泉郷ではこうした現状を受け止めながら、古くからの伝統的な湯治を失くすことなく、多様なニーズに応えるため、湯治プランの他、旅館のプランなどお客さまの要望に応じた宿泊ができるような工夫を続けています。

夜の温泉街活性化

肘折温泉は湯治場として栄え、早朝に朝市が立つなど、朝型の温泉地となっています。それに伴い商店も早朝から店を開き、夜の閉店が早い、いわば湯治客時間となっています。近年、短期滞在型の観光客が増えるにつれ、夜の温泉街が暗い、見るものがないと言った声が多く聞かれるようになりました。

そんな中、夜の温泉街を楽しむための取組として、肘折地区と東北芸術工科大学との連携による「ひじおりの灯」アートプロジェクトを開始

し、昨年で12年目を迎えました。アーティストが肘折に滞在しながら取材を行い、肘折の歴史や風景、文化や生活の様子を八角形の灯籠に描きます。旅館や商店の軒に吊るされた灯籠が夜の温泉街を彩り、夏の風物詩として親しまれています。こうして描かれた作品も年々多くなっており、これらの作品をいつでも鑑賞できるような取組も必要と考えています。

豪雪の活用

日本有数の豪雪地帯である肘折温



▶ おおくら雪ものがたり

◀ 地面だし競争



泉は、その雪を活用したイベントを数多く実施しています。高さ3mを超える雪壁に穴を掘り、ろうそくやキャンドルライトを灯す「肘折幻想雪回廊」や、降り積もった雪を掘り進み一番早く地面の土を掘り起こす競技である「地面だし競争MONDO」や「肘折」、世界一の雪だるまとしてギネスブックに登録された巨大雪だるま「おおくら君」を制作し、花火大会や甘酒のふるまいなどを行う「おおくら雪ものがたり」など、豪雪を資源とした取組を数多く実施しています。

また、今年で4年目となる「ド力雪・大雪割キャンペーン」は、大蔵村観光協会による豪雪を逆手に取った取

組です。24時間降雪量に応じて、旅館の宿泊や商店での買物が割引になるほか、これまでの最高積雪深を更新した場合は、旅館での宿泊が1泊無料となります。昨年度、445cmの観測史上最高積雪深を記録し、1泊無料となったことで全国から

大きな反響をいただきました。今年度以降も継続してサポートしていきたいと考えています。

雪は観光資源になると同時に、首都圏や遠方地域のお客さまから敬遠される要因の一つになっていますが、大蔵村の除雪体制は、「日本で最も除雪完備の村」を標榜し、万全を期していますので、ぜひ豪雪期の大蔵村を体験していただきたいと思います。

二次交通

最寄りの駅であるJR新庄駅から肘折温泉までは、車で約50分となっています。これまで地域交通を担っていた路線バスが利用客の減少に伴

い、平成29年で廃線となりました。これを受け、同年からは同じルートで村営のバスが運行しています。観光客の方が大蔵村へ移動する手段となっているのはもちろん、地元高校生の通学手段や年配の方の買物、病院の交通手段としても利用されています。運賃も多角的に考慮し、従来の路線バスの半額程度で、より利用しやすい金額に設定しています。

また、遠方から飛行機で観光に訪れる方が肘折温泉にアクセスしやすいように、山形空港と肘折温泉をつなぐ観光ライナーを運行しています。肘折温泉郷にある会社とタクシー会社が連携してこの事業を続けており、村がサポートしています。

四ヶ村の棚田

大蔵村の大きな地域資源の一つとして、「四ヶ村の棚田」があります。面積は全体で約120haあり、そのうちの12haが「日本の棚田百選」に選定されています。

棚田は、その保全・維持において、並々ならぬ労力が必要です。大蔵村は少子高齢化が進んでおり、後継者

不足が深刻となっています。棚田で農作業を行う農家の方々も同様で、耕作放棄地などが増えていることも事実です。

美しい棚田を多くの方に知ってもらおうと始めた取組の一つに、「四ヶ村棚田ほたる火コンサート」があります。元々は地元の方々が楽しむために棚田にろうそくの火を灯す「ほたる火祭り」として始まったもので、現在は同時にコンサートを行い、ほたる火コンサートとして実施しています。広大な棚田にほたる火が灯りオカリナの音色が響きわたる、一年に一夜限りの光景を楽しみたいと多



▲ 四ヶ村の棚田

◆ほたる火コンサート



さまざまな形でイベントへの協力を行っています。地元住民と子ども達のコミュニケーションの機会となっていると同時に、地元への関心を深める学習の場にもなっています。

また、四ヶ村の棚田では地元有志で組織される「棚田米生産販売組合」による棚田米の販売も行われています。四ヶ村の棚田米は葉山の雪解け水を水源とし、生活雑排水が一切入り込まない地域での生産であり、ロケーションの良さも相まってファン数は年々増えています。組合による棚田米オーナー制度では、自分で作った米を持ち帰ることができるの

はもちろん、田植え、稲刈りなどの体験が行われ、毎年、県内外から多数のオーナーの方々が集まっています。

一般の方も棚田米を購入することが可能で、首都圏への売り込みや観光イベントでのPRを通して、少しずつ注文数が増えている状況にあります。

大蔵村は、2020年の全国棚田サミット開催予定地となっており、全国から多くの参加者をお迎えするにあたり、地域の方々と協力しながら準備を進めているところです。

現状と今後の村づくりに ついて

大蔵村は少子高齢化が進んでおり、大学進学等をきっかけに若年層の村外への流出も少なくありません。これに伴い、温泉街や棚田のある地域だけでなく、村内全域で後継者不足や担い手不足が問題となっています。村では子育て支援住宅の整備や子育て支援医療制度による中学3年生までの医療費の無償化を行うことで、若者の住みやすい街づくりに力を入れてきました。ここ数年、子どもが

増えるなどその効果も現れ始めています。

基幹産業である農業、観光業においても、儲かる産業を目指し、支援を行ってきた結果、Uターンする若者が増加しています。特に、農業では新規就農する方々が増加しており、そうした若手農業者が大蔵村農業後継者の会、通称「メンズ農業」を結成しました。お互いに農業について意見交換や相談をしながら真剣に取り組んでおり、村の将来を支える貴重な存在となっています。

これまで、数多くの事業や施策を展開し継続してまいりましたが、全国的な人口減少とともに、我々地方は過疎化に歯止めがかからない現状にあります。私も、小さな村だからこそできる村づくりを心掛け、「大蔵村に住んで良かった」、「住み続けたい」と思えるような、また、自分生まれ育った村に誇りを持ち続けられるような村づくりのため、今後とも住民の方々との対話を大切にしながら、勇猛精進したいと考えています。

大蔵村長 加藤正美

(令和元年5月13日付第3079号)

くの人が集うイベントへと成長し、今では村最大の観光イベントとなっています。

ペットボトルとろうそくで作る「ほたる火」の作成にあたっては、地元中学生がペットボトルの回収を村内に呼びかけ、住民と共同でペイントを施し、棚田へ1、200本設置するほか、当日は点火のお手伝い、アーティストと一緒にオカリナの演奏、棚田に関するパンフレットの作成及び来場者への配布を行うなど、さま



▲肘折幻想雪回廊

▼半田山を望む桃源郷



「住みたいまち、こおり」を目指して 『献上桃の郷』展開プロジェクト

桑折町の概要

桑折町は、福島県中通り地方の北部に位置し、阿武隈川の清流と緑豊かな半田山の自然の恵みを受けた総面積42.97km²、人口約12,000人の町です。古くは、仙台藩伊達氏の発祥の地、日本三大鉱山のひとつと数えられた半田銀山、国内有数の養蚕地帯などとして時代を重ね、旧伊達郡役所など、先人たちがよって築き上げられた歴史的財産も多く残されています。

町の基幹産業は農業で、桃（りんご）、柿などの果樹栽培が盛んです。中でも桃は特に上質で、平成6年から現在まで25年連続で皇室に献上されています。

また、桑折工業団地には、自動車部品製造業など約30社の優良企業が集積しています。高速交通網の整備が進んでいることから、工場増設などの動き

福島県 桑折町

こおりまち

も活発で、より一層町民の雇用の確保や地域経済の活力につながることを期待されています。

21世紀の追分と人口減少対策

桑折町は、かつて交通の要衝地にある宿場町として、奥州・羽州街道の分岐点（追分）を有し、人・物・情報の往来で賑わいました。

現在、町にはJR東北本線（町内駅：桑折駅）及び東北新幹線（最寄駅：福島駅）の鉄道2線と、東北物流の大動脈である一般国道4号及び東北自動車道（最寄IC：国見、福島飯坂）の道路2本が町の中央部を南北に縦貫しています。

2年後の平成32年度中には東北中央自動車道（相馬福島道路）の本町区間（約2km）が開通予定であり、常磐自動車道や山形県方面へのアクセスが格



段に強化されます。現代版「追分」として、縦横に広がりのある物流や観光周遊ルートの形成等に期待が高まっております。広域的な経済発展に資する、新しい土地利用や企業誘致の推進を目指しています。

しかし、その一方で本町の人口は、昭和30年の16,974人をピークに、近年は少子高齢化の進行や核家族化、若者の都市への流出等により減少しており、平成27年10月に策定した「桑折町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン」の将来推計人口では2035年に10,000人を下回り、2060年には現在の半数程度まで減少することが予想されています。人口減少は、地域経済規模の縮小、行政サービスや地域活動等、町民生活への影響が懸念されることから、人口減少対策として、魅力的で住み良い町のブランドイメー



▲国の重要文化財「旧伊達郡役所」



▲東北新幹線の上を通過する東北中央自動車道（相馬福島道路）の本町区間の工事の様子（H30.9月）

ジ確立や、若者世代の移住定住促進など、各種施策に取り組んでいくことをしました。

「献上桃の郷」商標登録の認定

町のブランドイメージづくりのために取り組んだことの一つに「献上桃の郷」の商標登録の認定があります。

桑折町は上質な桃の産地として、平成6年から現在まで25年連続で献上桃の指定を受け続け、町産の桃「あかつき」が皇室へ贈られています。まさに、農家の方々の先進的な取組やたゆまぬ努力の賜物と言えます。これまでは、東日本大震災・原発事故災害など未曾有の大災害にも見舞われましたが、そ



▲献上桃選果式の様子

のような状況でも農家や地域住民が協力して対策を講じるほか、町を挙げてセールの活動を展開し、乗り越えてきました。

こうしたなか、平成25年と平成27年には天皇皇后両陛下の行幸啓を迎え、震災からの復興を成し遂げた果樹園でかけていただいた労いと感謝のお言葉は、多くの農家や町民の励みになりました。

このことにより、上質な桃の産地としての自信が確固たるものとなり、「桑折ブランド」づくりの第一歩につながりました。町は、かねてから「献上桃の郷」の商標登録を検討していましたが、天皇皇后両陛下のご来町を契機に、その気運が一層高まり、平成28年4月に特許庁から商標登録認定を受けるこ



▲天皇皇后両陛下下行幸啓記念碑

とことができました。

「献上桃の郷」展開プロジェクト始動

「献上桃の郷」の商標登録を契機に、町では本町産桃のブランド化を推進し、町のイメージアップと交流人口の拡大に努め、農家はもとより、町民所得の向上を目指しています。そのため、平成28年12月に策定した桑折町総合計画「献上桃の郷こおり創生プラン」では、「献上桃の郷」展開プロジェクトを重点プロジェクトとして位置付け、さまざまな施策を実施しています。

①6次化商品の開発

町振興公社では、季節を問わず上質な桃の香りと味わいを堪能できる6次化商品の一つとして、町産桃の主力品

▶ 献上桃の収穫時期の様子



種である「あかつき」の果汁を75%使用した「至福の桃ソルベ」を開発しました。食の一大イベント「FOODEX 美食女子グランプリ」で金賞を受賞したほか、「OMOTENASHI Selection (おもてなしセレクション)」で、外国人選定員による特別賞を受賞するなど、売れ行きも良く好評をいただいています。また、第2弾として、UHA 味覚糖㈱と共同開発した「至福の桃グミ」も町産桃「あかつき」のジュシーな味わいを気軽に堪能できる商品となっており、手軽なお土産として人気となっています。

今後も、町産桃のブランド力向上と産地振興のため、新たな6次化商品を企画開発していきます。

② 新たな「口」マーク制作

「献上桃の郷」の知名度を向上させるためには、PRイベントの開催やマ

スコミへの情報発信だけでなく、シティプロモーションの視点に立った取組の展開が必要となります。その取組の一つとして、本年3月に町の魅力を発信する新たな口ゴマークを制作しました。デザインのプロ提案者は東北芸術工科大学学長の中山ダイスケ氏で、前述の6次化商品



▲(上) 桑折町の米「夢の香」と桑折町の水「金剛水」で仕込んだ日本酒【純米吟醸うすにごり「momono」】、(左上) 至福の桃ソルベ、(左) 至福の桃グミ

組の展開が必要となります。その取組の一つとして、本年3月に町の魅力を発信する新たな口ゴマークを制作しました。デザインのプロ提案者は東北芸術工科大学学長の中山ダイスケ氏で、前述の6次化商品



▲新たに作成した桑折町口ゴマーク

「至福の桃ソルベ」や「至福の桃グミ」のデザインも手掛けた方です。今後は、この口ゴマークを活用した情報発信により、町の財産である自然、歴史、文化、特産品等を「桑折ブランド」として確立していくとともに、町の知名度向上やイメージアップにつながるようなPRグッズの製作にも取り組んでいきます。

③ 農業振興活動拠点施設「Legare Koori (レガーレこおり)」オープン

本年4月24日にオープンしたこの施設は、農政部にある町立幼稚園統合後の旧園舎を改修し、農家と触れ合えるイベントや6次化商品の試作研究、観光案内など、多目的な活用を図ることを目的とした施設となっています。

また、施設内のレストラン「Pizza

Sta (ピザスタ)」では、四季の地場農産物をふんだんに使用した本格ピザが好評で、10月21日には来場者数が20,000人を超え、町内はもとより県外の方からも話題の人気スポットとなっています。

この施設は今、地方創生の好事例としても注目が集まっており、「食」の提供や「体験交流」、「地元農家と消費者のふれあいマルシェ」などといった活用を図ることで、より一層、地域活性化や交流人口・関係人口の拡大へつなげていきたいと考えています。



▲桑折町の季節のフルーツと野菜を使ったPizza Sta (ピザスタ)の看板メニュー「ピザヨーチェン」



▲農業振興活動拠点施設「Legare Koori (レガーレこおり)」

若者世代をターゲットとした 移住定住施策

「桑折町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン」の将来推計人口によれば、平成30年4月時点で、総人口が11,752人にまで減少すると予想されていましたが、実際は12,055人（住民基本台帳人口）と、予測を303人も上回ることができました。

町では、子育て世代が多い45歳未満の方々への移住定住に関連した補助制度として、「桑折町若者定住促進事業補助金」や「桑折町若者定住者向けJR通勤補助金」、「桑折町新婚世帯家賃支援事業補助金」を設置しています。昨年度の実績は、補助金を活用して住宅購入やリフォームをした方が、当初の予想を大きく上回る30件に達しました。総世帯員数で見ると115名の移住定住につながり、そのうち約半数は、



▲「Legare Koori (レガーレこおり)」を活用した親子交流イベントの様子

また、『桑折町まち・ひと・しごと創生総合戦略』策定以来、「子ども医療費の助成」や「多子世帯への保育所保育料、幼稚園授業料の減免」、「入園・入学祝の制服支給」や「給食費が幼稚園は無料、小中学校は半額」など、若者や子育て世代等のニーズに応えた施策を打ち出しており、こうした数々の施策が功を奏し、人口減少幅の抑制につながっているものと評価しています。



▲町の補助金を活用して県外から移住したご家族

住みたいまち、こおりへ

桑折町総合計画では「みんなとつながりみんなが活躍できる安心のまち桑折」を町の未来像に掲げ、「献上桃の郷」展開プロジェクトをはじめとする4大重点プロジェクトを中心に、各種施策を展開しています。

現在、桑折町では2021年供用開始を目標に新庁舎建設を進めています。この庁舎は、町民の安全安心を守る拠点として「災害に強い防災拠点」「町民が訪れやすい」「事務効率が良い」「桑折町らしい」「長寿命でコストが少



▲8月18・19日に開催した野外音楽イベント「こおり満福まつり」

桑折町新庁舎本体の完成予想図



ない」「町民の集いの場」といった6つの理念のもと、建物や部屋の配置等を計画しました。

本町は今、明るい未来を形づくるうえで非常に重要な時期となつています。これからも、町の事業に磨きをかけ、それぞれが光り輝く「桑折ブランド」を確立し、町民とともに「住みたいまち、こおり」の実現に向けて一層力を入れてまいります。

桑折町長 高橋 宣博
(平成30年11月5日付第3060)

▼町の中央を流れる槻川



和紙のふるさと 小川町

小川和紙の歴史と伝統を継ぐ

「武蔵の小京都」小川町

埼玉県比企郡小川町は、県の北西部に位置し、周囲を豊かな自然と外秩父の山々に囲まれ、市街地の中央には槻川が流れています。盆地を形成していることに加え、和紙・建具・酒造・絹などの伝統産業で古くからの歴史・文化を備えていることから、「武蔵の小京都」と呼ばれています。

都心から60km圏に位置し、東武東上線、JR八高線の電車による「小川町駅」、関越自動車道の「嵐山小川IC」などがあり、東京まで1時間程度で移動することができます。このため、通勤通学の便の良さはもちろん、ハイキングなどの日帰り旅行の観光客も多く訪れています。

人口は平成9年には最大38,000

埼玉県 小川町

おがわまち



0人まで増加したものの、その後減少に転じ、平成30年3月末には30,474人まで減少してしまいました。人口減少問題は、小川町にとっても重要な課題となっており、人口の誘導・定住促進のため、小川町まち・ひと・しごと創生総合戦略に取り組んでいます。

1300年の歴史がある「小川和紙」

埼玉の郷土かるたの「お」の札で「折り鶴に願いを込めて小川和紙」とうたわれる通り、小川町といえば手漉き和紙といわれるほど、和紙の伝統産業が有名です。そもそも、宝龜5年（744年）の正倉院文書に「武蔵国紙四八〇帳」の紙が納められていたとあり、これが初出の記録とされています。また、承和8年（841年）の太政官府には武蔵国男衾郡（当時の小川地方）



▲仙元山から見る市街地

の大領であった壬生吉志福正がわが子の中男作物として紙を前納した記載があります。このことから、おそらく小川地方では8世紀にはすでに和紙を生産する体制が作られていたことが推察されます。小川和紙は1300年の歴史があると一般に言われているのは、そのためです。

その後、中世には和紙に関わる記録がほとんどなくなり、当時の様子を知らずにはできませんが、近世の江戸時代になると、江戸が経済の中心地として飛躍していく中、少しずつ古文書が見つかっていきます。特にこの地方の和紙は「山物」（江戸から見て山の西の方という意味か？）などという表現で記載されていることから、当時の和紙産業の様子がわかってくるようになりまし

ユネスコ無形文化遺産登録

平成26年（2014年）11月27日の午前3時、小川町と隣接する東秩父村と共に伝承されている「細川紙」の技術が、「和紙・日本の手漉き和紙技術」として、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）無形文化遺産になったという連絡がありました。国の重要無形文化財である石州半紙（島根県浜田市）と本美濃紙（岐阜県美濃市）と共に登録されたものでしたが、埼玉県においては初の出来事でした。パリで行われていた会議において決定したもので、若干の時差があり、フランスの時間では26日午後5時頃の登録と想定されます。まさに、この瞬間に取組がスタートを切りました。

「細川紙」とは

細川紙とは、江戸時代に世界的な大都市「江戸」において大人気を博した和紙のことです。起源は紀州（現和歌山県）の高野山麓の細川村において漉かれた「細川奉書」と言われています。これが大阪商人を通じて江戸にほど近い小川町周辺に漉きたてを依頼され、以降「細川紙」の名称で江戸において流通したものと伝えられています。当時、小川の紙漉き職人らはさまざまな和紙を漉いており、この「細川紙」に



▲細川紙

ついても容易にその技術をもって江戸商人たちの需要に応えたものと考えられています。

昭和53年（1978年）、細川紙は国の重要無形文化財に指定されています。「団体指定」といい、その技術を持している職人らによる細川紙技術者協会の名で指定されたものです。細川紙のその要件は、①楮（こうぞ）だけで作られていること②伝統的な製法と製紙用具を使用して流し漉きですること③細川紙の風合いなどが保たれていること、となっています。

ユネスコ無形文化遺産に登録されるための申請については、国（文化庁）が団体指定の3産地（他に島根県浜田市の「石州半紙」、岐阜県美濃市の「本美濃紙」）の和紙で行ったため、個別産地ではなく全体として和紙による登録となりましたが、その内容は3産地そのものであったわけです。

ユネスコ3紙の連携課題解決に向けて

ユネスコに登録された3つの和紙産地とその自治体等は互いに連携を深め、年一回のサミットや各地でのアピールイベントを開催しています。平成29年（2017年）7月1日、小川町と東秩父村の共同開催で「和紙サミット」が開催されました。その中のシンポジウムで、和紙業界の抱える問題点が3つ指摘されました。

- ① 後継者不足
- ② 楮などの原材料不足
- ③ 道具不足

かねてより言われていた問題点が、このサミットを主催する無形文化遺産登録手漉和紙連携推進実行委員会によ



▲ユネスコ登録三紙によるイベント（福岡・博多にて）



▲地楮刈取り風景

り明確になりました。国の重要無形文化財に指定された当時から、本来は問題解決のための動きを進めていかなければならなかったものが、ユネスコ無形文化遺産に登録されたことで、さらに顕在化したものと捉えています。

課題の中で、小川町は、まずは後継者育成を急がなければならぬ、と取組を始めました。期間を3年として平成28年（2016年）10月から6名の研修生が手漉き技術の習得に励んでいます。「まずは腕（技術）をつけよ」という職人の声を受けて研修を行い、修了した後は和紙職人として小川町で生業に励んでいってもらうこととなります。

次に楮の安定供給については、すでに行っていた楮畑での地楮生産を続け



▲紙漉き風景

ながら、新たな楮畑の拡大を進めてきています。さらに、収穫してから原料にするまでの大変な手間のかかる作業を行っていくことで、地楮の利用促進も図っています。これは必ずしも高知県や栃木県での楮生産を脅かすのではなく、全国的に生産者を保護しながら地楮の存在意義を高めていくことを目的としています。

3点目の道具不足についてです。かつて簾編み職人が小川町にもいましたが、後継者がいないまま廃業してしまいました。現在は、高知県・静岡県の職人に依頼していますが、その職人も全国から注文を受けており、順番待ちで数年かかってしまう状況です。特殊な技術を有する職業だけに、全国的な

視野で解決方法を模索していく必要があります。

思えば先見の明 「小川町七夕まつり」

全てがユネスコ無形文化遺産に登録された時から始まったわけではありませんが、すでに昭和24年（1949年）、和紙の普及宣伝に危機感を持った小川町の先人達は、和紙をかんたんに使用する祭りを、戦後間もない頃に始めました。それが「小川町七夕まつり」です。

当時、機械紙や洋紙に押され、和紙業界は困窮を極めていました。これをいち早く見極めた名譽町民になってい



▶七夕まつり

る小久保太郎氏は、仙台の七夕まつりを参考にこの祭りを開催しました。その後の昭和46年（1971年）、同じ夏に町内で行われていた祇園祭を合体させ、さらに大きな祭りに発展させました。その結果、全国的には珍しい「静かな」七夕から「賑やかな」七夕へと変貌を遂げたのです。

祭りの中のイベントも徐々に発展してきました。当初から行われていた竹飾りコンクールや花火大会に加え、昭和27年（1952年）には町民が参加できる七夕踊りなども行われ、盛大さを増していきました。平成19年（2007年）には商工会青年部主導の公募によりマスコミキャラクターである「星夢ちゃん」なども登場し、今年で第70回を迎えました。

観光レベルの取組が産業としての小川和紙を支え、文化財の細川紙の技術をつないできました。各種のイベントは多くの人たちに和紙のすばらしさを伝え、地域の方々の誇りを醸成してきました。ユネスコ無形文化遺産登録だけがきっかけではなく、一種の危機感をもって事業展開を積極的に進めてきました。観光と文化の両輪を備えた自動車ならそのエンジンは産業となります。進む先には何があるのか。和紙による小川町の発展を見るために。

小川町 にぎわい創出課
（平成30年12月17日付第3064号）

サーフィンと生きる町



一宮版サーフォノミクス

5 観光振興、イベント（ご当地フェスタ・祭り）・遺産（世界・日本）

一宮町の概要（紹介）

一宮町はゆるやかに弧を描く九十九里浜の南端に位置し、町の東側には美しい海岸線が広がり西側には丘陵団地をひかえた、風光明媚で温暖な気候の地域です。人口は、平成31年4月1日現在12,455人です。町の総面積は、22・97km²で、その大半を肥沃な田や畑、山林が占めており、四季を通してあふれる緑に包まれています。

古くは上総一宮1万3000石の城下町として栄え、また、地曳網や製塩業などの産業の場としても栄えた歴史をもち、その後は日本一といわれるガラス温室団地など、ハウス

千葉県 一宮町

いちのみやまち



栽培を中心とした近郊蔬菜果樹園芸を基幹産業にしています。

玉前神社周辺を中心に都市集積が進み、明治初期には県内第6位の人口を有するまでに発展しました。上総一ノ宮駅から玉前神社周辺に広がる商店街は、地曳網漁の隆盛や別荘地としての発展といった時代背景の中で、サービスマスの拠点として栄えてきました。近年は、郊外型大規模店の発展や自動車利用の増加などの影響により商店街における日常的消费は減少していますが、玉前神社への参詣客などによる観光消費の取り込みに成功している店舗も見られます。

海岸線では、年間を通じて良質な波が打ち寄せることから、1970

一宮町（空撮）



年代頃から、サーフィンが盛んになりました。海岸全域にわたってサーフポイントがあることから、現在では町内外から多くのサーフィン愛好家が来訪しています。こうした中、東京2020オリンピックのサーフィン競技開催町の決定を受け、サー

フィンを軸としたまちづくりを推進しています。

一宮町は、緑と海と太陽に恵まれた自然環境により東京近郊屈指のリゾート地として多くの観光客を集めています。また、東京駅まで特急電車で約1時間と交通アクセスが良く、

土地も比較的安価であるなど、立地条件にも恵まれています。このため、豊かな自然環境やサーフィンを楽しむことを目的とした移住者も多く、町の人口は堅調に推移し、子育て世代の転入も多いことから、小学校の児童数や中学校の生徒数が増加傾向にあります。

取組の経緯

一宮町がサーフタウンとしてのPRを始めたのは、2009年、役場内に移住推進担当を設置してから

でした。

2014年、日本創生会議が発表した「消滅可能性都市」に一宮町は該当しておらず、町が要因を調べたところ、年間60万人もの観光客が人口1万2,000人の同町を訪れていたということが分かりました。町では、その結果を受け、海岸の全域にわたって良好なサーフポイントが存在するロケーション、地元にかかりと根付くサーフィン文化などの町の特長を地域活性化に活かそうと、2015年10月に策定した「一宮町まち・ひと・しごと創生総合戦略」の中で、「一宮版サーフオノミクス」を打ち出しました。

サーフオノミクスとは、サーファーが集まることによる経済効果のことを指す言葉です。自然保護と経済振興を両立できるサーフオノミクスはアメリカではすでに研究が始まっています。

一宮版サーフオノミクスは、海沿いの文化と豊かな自然、上総国一之宮としての伝統を享受し、ゆとりある住宅環境や働く場を創出することで、町の魅力に磨きをかけ、新たな人々たちを呼び込むという好循環を生

役場外観



み出す仕組みです。サーファーが集まることによる直接的な経済効果だけでなく、移住・定住の促進、魅力発信という循環型の経済効果を打ち出していく考え方です。

一宮版サーフオノミクスは5つの柱で構成されています。

①サーフストリート構想

海岸から県道30号線に沿ったエリ

アをサーフストリートとして位置付け、交流拠点となるサーフィンセンターを設置し、当該エリアをブランドینگする。

②都市軸の整備

上総一ノ宮駅西側エリアの中心市街地としての機能を強化し、駅周辺と駅東側のサーフストリートを結ぶため、駅を中心とした都市軸を整備し、町全体の活性化を図る。

③雇用創出と事業創出

町の基幹産業である農業の構造改革を進め、雇用の創出を図り、既存企業の競争力を高めることで雇用を安定させる。また、社会構造の変化に伴う課題が大きくなることから、その解決手法をコミュニティビジネス化し、事業の創出を進める。

④子育て支援と個性のある教育の推進

すべての子育て世代が安心して子育てができるよう、子育て支援サービスの充実を図る。また、時代にあった先進手法を取り入れながら、本町ならではの教育環境の充実を推進する。

⑤シティプロモーション

自然の魅力だけでなく、スポーツ体験や農産品、玉前神社等、多くの

地域資源を内外に発信するプロモーション事業を通じて、来訪者や移住者の増加につなげ、一宮版サーフオノミクスの好循環を生み出す。

取組内容

町ではサーファーにアンケート調

査を実施し、集まった意見や要望をもとにサーフスポットの駐車場舗装やシャワーの設置などの整備を行いました。

一宮版サーフオノミクスでは、サーフストリートの経済効果を駅周辺にも波及させることを目指しています。そのことから、2017年7月には、

官民連携のまちづくり会

社「㈱一宮リアライズ」が施設を管理運営している「SUZUMINE」を商店街にオープンしました。空き店舗をリノベーションして誕生した「SUZUMINE」には、お店を出したい人が期間限定で挑戦するチャレンジショップやシャワーやサーフボードの保管庫を備えたシェアオフィス、ラーメンカフェなどが入っています。

子育てという面では、町単独の教育として、ICT（情報通信技術）を使いこなせる人材を育成するため、町立東浪見小



「SUZUMINE」

観光案内所



学校と一宮小学校において、プログラミングキットがインストールされたタブレットや専用サーバー無線アクセスポイント等を設置。これを利用したロボットプログラミング授業を行っています。このほか各小学校では、サーフィンの魅力を子どもにも知ってもらえるよう、プール開きの際にプロのサーファーによるサーフィン教室が行われています。

2018年4月には、町の観光拠

点として上総一ノ宮駅前に観光案内所がリニューアルオープンしました。観光案内所では、レンタサイクルやサーフボードの貸し出しを行っています。また、海と里山を一緒に楽しめるよう観光マップを用意しています。

「一宮版サーフオノミクス」の効果をより高めるために、サーフィンから波及する一宮町の文化のPRを目的として「サーフィンと生きる町。」というWEBサイトを開設しました。

「サーフィンと生きる町」では、国内で開催された中でも最高レベルにあたる大会（QS6000）の様子や、サーファー100人にアンケートを取り、作成したプロモーションビデオなどが掲載されています。上総一ノ宮駅では新しく東口の開設が決まり、2020年6月の完成が予定されています。東口が開設されることにより、駅を利用する方が増え、現在よりも駅周辺に活気がもたらされることを期待しています。

町ではこのような事業を通じて町全体を活性化させ、東京2020オリンピック競技大会終了後もサーファアを主とした若者や子育て世代

が定住し続けるような魅力あるまちづくりを目指しています。

現状と今後の課題

海沿いを走る県道30号線のエリアを「一宮サーフストリート」と位置付け、観光振興を図っています。現在、一宮サーフストリート沿いにはオシャレなサーフショップやカフェ、



▶サーフストリート

◀上総一ノ宮駅東口外観（イメージ）



駅周辺が徐々に活気付いているところです。今後、東口が開設され、来町客が増加することにより、町全体が盛り上がりつつあることを期待しています。また、東京2020オリンピック競技大会への機運醸成を図るうえでも、町全体でサーフィンへの理解度を深めていく必要があります。

全国的に少子高齢化が進んでいますが、さらに高齢化が進み、人口が減少していく中で、一宮町がサーファアの人口を現状のまま維持し続けることは困難です。人口減少が進む中でもサーファアの来町者数を維持し続けるためには、今後どう動き出すかが重要となります。

東京2020オリンピック競技大会期間中は国内外から多くの観光客などが来訪し、オリンピック終了後には移住定住者の増加が見込まれます。町では移住定住者を受け入れるために海側だけでなく、駅前や商店街等の町全体の活性化も合わせたまちづくりを進めなければならないと考えます。

一宮町企画課

上総一ノ宮駅東口の開設が決まり、

（令和元年10月28日付第3099号）

忍野八海より富士山を望む



富士山と湧水の織りなす風景を継承するために

未来への投資

5 観光振興、イベント（ご当地フェスタ・祭り）・遺産（世界・日本）

忍野村の概要

忍野村は、山梨県東南部の富士北麓に位置し、村の中心部には桂川・新名庄川が流れ、雄大な富士山を目の当たりにできる、富士山に代表される風光明媚な景観と豊かな自然、豊富な地下水に恵まれた環境にあります。

村の面積は25・05km²で、周囲を富士山、高座山、杓子山、石割山などの山々に囲まれた約3、900世帯の山村ですが、昭和44年以降、周辺地域の道路網が整備されたことに伴い都心からのアクセスが向上し、また富士山が世界文化遺産に登録されたことも相まって、忍野八海などに国内外から多くの観光客が訪れています。

このような恵まれた条件を背景に、忍野村は昭和55年以降人口が増加傾向にあり、昭和55年には6,077人だった人口が平成7年には人口8,000人を超え、平成27年度には約9,300人に達し、平成30年5月末時点での人口は9,720人となり、今なお人口の増加は続いています。また、昨年度は高齢化率が18・29%と低く、合計特殊出生率は1・82%と県内でも高い数値を示しており、近年は製造業が盛んで大手企業の大規模な生産工場や研究拠点が立地し、村内にも中小規模の工場等の立地が加速している状況にあります。これに合わせて、村でも観光や農業、医療・福祉、子育てなど「住みやすい村づくり」のための施策や「世界で活躍する人材の育成」のための施策には特に力を注いでいるところです。

山梨県 忍野村

おしのむら



世界文化遺産「富士山」の 構成資産となつて、住民意識の変化、

平成25年6月22日に富士山が「世界文化遺産」に登録され、同時に静岡・

山梨両県合わせて25の構成資産が選定されました。選定された構成資産のうち、忍野村では忍野八海を構成している8つの池すべてが指定されたことにより、選定前後では観光客数の増加が顕著にあらわれています。特に東南アジアからの観光客が急速に増加し、毎日約100台以上の大型バスが周辺駐車場を埋めている状況にあります。しかしながら、観光客の増加に伴い、トイレの使用方法や個人敷地内への無断立入、構成資産である池へのコイン等の投げ入れ、車道での写真撮影など、生活習慣の違い等による外国人観光客のマナー違反が深刻な問題となっています。現在、諸問題解決のために行政と観光協会や地域住民等が協力し合っており、問題解決に向けて一つ一つ取り組んでいるところです。



▲忍野から流れる湧水を含む桂川の流れ

また、ボランティアや地域住民による定期的な草刈りやゴミ拾い等の美化活動、構成資産の保存活動への積極的参加、周辺環境にマッチした修景づくりなど自然の美しさを損なわないような景観保存に努めるなど、忍野八海の保全に努めようと住民意識にも変化が表れてきたものと感じています。

湧水との共存 ～地下水への対応～

忍野村は役場がほぼ村の中心に位置し、役場より東側を内野地区、西側を忍草地区と呼びます。忍野八海が点在している忍草地区では湧水に恵まれ、古くは「忍野湖」とも言われた時代があります。その特徴として水位は高く、過去の地質調査等からN値が非常に小さい軟弱地盤であることが伺え、昔は湖底であったと思われる名残も見受けられます。また、東側にある内野地区で



▲忍野八海一の湧水量を誇る湧池

は地区の大半が富士山噴火時の溶岩流で形成されているため、忍草地区とは異なり水位は低く、過去の地質調査からN値も非常に大きい値を示していることが分かり、堅固な地盤で構成されている地区であると考えられます。このように両地区の特性が

相反していることから、住宅や建築物、さらには土木構造物を建設する場合にはそれぞれの地区に適合した工法や方法を選択する必要があります。

本村では地下水の保全を重視し、平成28年度より地下水の流動方向や涵養域、貯水量などを把握するため、京都市内で地

球環境問題の解決に向けた総合的な研究を行っている大学共同利用機関「総合地球環境学研究所」へ調査依頼をして、継続的に地下水との関わりを調べているところです。今後は、本調査結果に基づき地下水という大切な資源を保全しつつ、安心・安全な村民のための村づくりに取り組みたいと考えています。

村づくりの施策大綱 ～忍野村八念八策～そして未来へ

忍野村では、国の動向を踏まえ「第5次忍野村総合計画」を1年前倒しして、平成29年度より新たな総合計画をスタートさせるため、平成28年度に第6次忍野村総合計画を策定しました。計画策定に当たっては、平成27年度に策定した「忍野村地方創生総合戦略」で定めた忍野村の将来像を尊重し、村としての一貫した方向性を堅持することが望ましいとの結論のもと住民とともに考え、村にとって重要な施策を絞り込んだうえで、計画を推進していくこととしました。計画は基本構想と基本計画とに分類して、基本方針を4つの側面から組み立て、忍野八海の「八」にあやかり「忍野村八念八策」と題し策1～策8を定め、村づくりの施策大綱として整合性を図ることも重視しました。

基本方針の内容は、

- ① 将来…みんなで未来を創る村
- ② 人材…いつまでもいきいき学べる村



▶忍野八海と新名庄川の水が流れ込む鐘山の滝



▲春の遠足

- ③仕事…好奇心に応える村
- ④環境…富士の恵を守る村
- の4テーマに絞り、施策大綱の内容としては、
- ①みんなで未来を創る村では、
- 策1 期待に応えられる行政の実現
- 策2 暮らしやすくなる村づくり
- ②いつまでもいきいき学べる村では、
- 策3 世界で活躍する人材の育成
- 策4 楽しく齢を重ねられる仕組みづくり
- ③好奇心に応える村では、
- 策5 知性を刺激する産業創造支援
- 策6 集い楽しむ機会と魅力づくり
- ④富士の恵を守る村では、
- 策7 100年後も誇れる自然環境の継承
- 策8 災害発生にうろたえない対策準備

の8つの策を定め、平成29年度より順次実施してきました。そのような中で、平成29年度の主要事業としては子育て支援の充実策として総務省の補助事業を活用し、「おしの子育て支援プラットフォーム推進事業」で母子健康手帳の付加サービスを図る目的で「母子健康情報サービス」というポータルサイトを構築しました。このサービスでは、子どもの出生前からの記録（エコー画像や写真等の保存が可能）や予防接種の状況、次回接種時期のお知らせ、産前産後の心配事相談や子どもの成長に合わせた相談などが可能で、さらには遠方で暮らしている祖父母と情報共有ができるため、遠方にいながらも孫の成長の様子、記録が確認できるといったメリットがあります。また、各施策では、策2の「暮らしやすくなる村づくり」で、通勤ラッシュ時の交通渋滞緩和を見据えた道路網の改善、

▲電子母子手帳の案内



▲忍野中学校

住みやすい住宅づくりとして既存住宅へのリフォーム補助、定住化促進のため新築住宅への補助金支給などの推進を図り、策3の「世界で活躍する人材の育成」では、英語教育の拡充を図るために年少から小学2年生までを対象とした外国人講師等による英会話教室の開催、中学校ではスカイプを利用して海外校との国際交流授業（ディスカッション授業）などを実施してきました。

また、平成30年度事業として、昨年度に引き続き英会話教室やスカイプによる海外校との交流事業を実施し、さらに英語教育の一つの取組として小学



▲海外交流授業の風景

校での放課後倶楽部に英語を取り入れた「遊び」や外国のお菓子作りなどの「体験」等を昨年度事業に追加し計画しているところです。なお、平成30年度の主要事業として、策3の「世界で活躍する人材の育成」では、IoT/ICTを活用した産業用ロボットのプログラミング教材の作成及びプログラミングの広域連携などを計画しているところです。

今後は、将来の忍野村を背負う子どもたちのことを考えて、「知恵を絞り、知識を活かし」、財源を「探し、稼ぎ」、効率の良い事業展開へと果敢に取り組んでいかなければならないと考えています。

忍野村長 天野 多喜雄
（平成30年9月17日付第3054号）

▼SUPクルージング体験

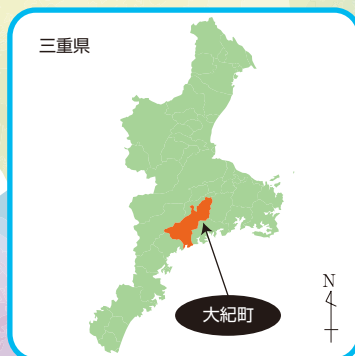


大紀町の体験型観光事業と特産品

大紀町の概要

大紀町は三重県の中南部に位置し、南部が海岸に面するほかは、東西北部は他の4町に隣接しています。東西約24・8km、南北約26・3kmで、総面積233・32km²のうち約91%を山林が占めています。地形は全般に急峻で、町内を流れる一級河川の宮川、大内山川、藤川沿いに民家と耕地が散在する農山村部と、僅かな土地に民家が集中する海岸部から成る典型的な農山漁村地域です。平成17年2月14日に「旧大宮町」「旧紀勢

三重県
大紀町
たいきちょう



町「旧大内山村」の2町1村が合併し、海と山の幸に恵まれた、美しい自然に囲まれた風光明媚な地で、四季折々の彩りが楽しめる町になりました。

また、世界遺産に登録されている熊野古道「ツツラト峠」をはじめ、今までそれぞれの地域が長い時間を



▶世界遺産熊野古道ツツラト峠

かけて培ってきた伝統文化・気風、風習などは、古来より脈々と受け継がれています。

比較的温暖な気候ではありますが、降水量は多めで、また、山間部と海岸部では地勢による違いがみられます。特に梅雨時期や台風シーズン、秋雨時期に多量の降水量があり、停滞前線等の影響を受けやすい地域と言えます。

人口は令和元年11月末現在で8、367人。毎年約1%ずつ減少しており、少子高齢化に伴う年少人口の減少と高齢人口の増加が、人口全体の減少と相まって、生産年齢人口も年々減少しており、次世代を担う人材の確保と育成が当町の施策として急務となっています。

大紀町商工会の取組

地域資源を活用した特産品開発と体験型観光を切り口にした新たな農山漁村体験型観光事業の構築を目指し、平成25年に大紀町商工会の下部組織として大紀町地域活性化協議会を設立しました。

翌年の平成26年度からは、大紀町

の「海・山・川」の恵みを活かした地域産品を「大紀ブランド」として認定する事業を開始し、ブランドロゴシールを貼付することで、商品に付加価値をつけ、また大紀町の統一ブランドイメージを与えるよう実践しています。キャッチフレーズは「海も」「山も」「川も」で、自然の恵みであることを強調しています。三重県内の大型商業施設や都市部で開催される物産展へも積極的に出展し、消費者の生の声を直接聞くことにより、生産者の自信や、今後の商品開発への意欲向上と販路拡大による所得向上に繋がっていくものと期待しています。

体験プログラムの充実

大紀町地域活性化協議会は、地域の特性を活かしたオリジナルの自然体験プログラムの開発にも熱心に力を注ぎ、特に女性に人気のある「美・健康・癒し」をテーマとした美容ツーリズム「海ヨガ」「山ヨガ」「SUPヨガ」やヘルスツーリズムを本格的に商品化し、地域外からの交流人口の増加を目指しています。



▲山ヨガ体験

他にも、農林漁業者をはじめ、農協、森林組合、漁協、地域おこしグループなどと連携し、農林漁業体験、自然体験、暮らし文化体験、食育体験など、実に60種類以上の体験プログラムを開発し受け入れを行っています。

体験民宿の展開

大紀町地域活性化協議会の組織には、体験施設、体験指導者などで構成された「体験部会」、観光事業者、観光施設などで構成された「観光部

会」、そして体験民宿などを中心に構成された「民泊部会」などがあり、農山漁村体験型観光事業をビジネスとして実施できる受入体制を整備しています。

そんな中、体験プログラムの開発や各団体と連携した受入態勢づくりは次々と充実する一方で、宿泊施設が少なく、日帰りの体験メニューしか実施できないことで、町内での消費も伸びずなかなか収益に結びつかないという課題がありました。

平成28年4月に農林漁業体験民宿開業に関する規制が緩和されると、協議会が開業に向けてのサポートを行うことで、新たに開業する体験民宿が徐々に増え始め、協議会が業者間の連携を図り、ある程度まとまった人数を受け入れることが可能となり、この年度に海外から大学生の団体を4回、計130名を受け入れることができ、本格的なビジネスとしての展開の可能性が見えてきたように感じました。

その後も更に民泊開業は積極的に促進し、現時点で19軒が宿泊の受入態勢を整えており、看板・パンフレット・指差しシール等の多言語表示な

ども行い、海外からの顧客の需要が順調に高まり、インバウンド事業としての成功の役割を十分に果たしているところです。

これからも地域固有の伝統文化や郷土料理、人々の暮らしなどを体験



▲民泊体験風景



できるメニューの効果的なプロモーションを行い、体験民泊の質をブラッシュアップして「食」「体験」メニューを充実し、新しい産業の一つとして目標である国内の修学旅行や教育旅行の誘致を実現していただきたいです。

地場産業の活性化

体験メニューで地域おこしが展開される中、昔から続く地域特有の海・山・川の産業が継承されており、体験メニューの中にも数多く組み込まれています。



▲錦ブリまつり

大紀町唯一の海岸部には漁業が盛んな錦地区があります。漁獲量は昔に比べると減少しているものの、漁協では直営店を開設し、魚介類の販売、加工品の開発など活発な事業展開を示しています。加工品の中では「Fishier」ブランドで準グランプリを獲得した「真鯛の塩麹漬け」が多く、食通から高い評価を受けている人気の商品です。

ブリは桜が咲くころに水揚げされるため古くから「サクラブリ」と呼ばれ親しまれており、時期になると「ブリまつり」が行われるほど活気にあふれた代表的な産物です。

海藻「ひろめ」もこの地域だけの貴重な海の幸で、ひろめオーナー制度があり収穫の体験もできます。最近では「塩蔵ひろめ」を商品開発し、季節を問わず食することができるようにもなりました。

養殖魚のエサやり体験は海ならではの体験メニューで、船に乗ることも楽しみのひとつです。

町が合併したことによって山間部が増え、元々それぞれの地域で行われていた朝市などに冷蔵庫を走らせ、新鮮な魚介類を提供する販売方法も



▲伊勢神宮へ奉納した大内山川の鮎

今では見慣れた光景となりました。さまざまなアイデアが町を活気づけて知名度を上げていると思われるです。

清流大内山川の鮎は「清流めぐり利き鮎会」で全国の準グランプリを獲得しています。おとり鮎を泳がせて釣る「友釣り漁」は、最盛期には県内外からたくさんの愛好者が川に並び一斉に釣りを楽しむという風景が定番です。

大内山酪農の牛乳は、学校給食では三重県内のシェア率が高く「大内山牛乳」として関西・中京圏では名が知られており、また、伊勢志摩サミットの際に食材として提供した

ヨーグルト、種類も豊富なアイスクリームやプリンなど、長年親しまれている乳製品が今でも人気を呼んでいます。

三重県といえば松阪牛を連想する人も多いでしょう。実はこの大紀町は古くから和牛の産地で、七保地区では「七保牛」として地域ブランドを確立して肥育が行われています。毎年行われている松阪肉牛共進会では、松阪牛の肥育エリアに加わって以降5度の「優秀賞一席」チャンピオンに輝いており、昨年を含む3年間は連続で制覇し、上位にも大紀町の和牛がずらりと選ばれる快挙を成



▲大内山酪農農業協同組合の乳製品

このような体験メニュー、地域特産品が観光に繋がり、交流人口を増やし、町が活性化することに期待を



し遂げており、松阪牛を育てる町の代表格になったと言っても過言ではないと自負するところです。

肥育農家の高齢化が浮き彫りになる中、若い担い手の姿もちらほら見えるようになり、又、肉牛肥育への支援も功を成し、地域に根付いた産業の衰退の歯止めにも寄与しているように思われます。



▲松阪肉牛共進会優秀賞1席（令和元年）



▲世界遺産熊野古道ツツラト峠からの展望

込める他、世界遺産に登録された「熊野古道ツツラト峠」や、伊勢神宮内宮の別宮である「瀧原宮」など名高い文化資産や観光資源を求めて来訪される方も多く、熊野古道の世界遺産登録時や神宮の式年遷宮の影響を受けて入込客が増えることもしばしばあります。

また、海から山へのアップダウンを繰り返す自然の地形を活かしたコースで行われるトレイルランニングレースが最近では若い世代に人気があり、恒例イベントになりつつあ

ります。

大紀町には観光協会がなく、地域の利を活かした体験、自然や文化資源の活用、特産品の販売などは、商工会をはじめとしたいろいろな関連団体なくては成り立ちません。これからも行政と各種団体、住民が一体となって連携し、大紀町の魅力を余すことなく情報発信していきたいと思っています。

大紀町長 谷口 友見
（令和2年3月2日付第3111号）



▲トレイルランニングレース（大紀町シーサイドトレイル）

▼道の駅「お茶の京都 みなみやましろ村」



「ひと」と「ひと」が交わるむらづくり
持続可能な村づくりをめざして

南山城村の概要

南山城村は、深い緑の山々に囲まれ清らかな木津川が東西を流れる、「京都府唯一の村」です。面積は64・11km²で、南北13・21km、東西9・52kmと東西南北に広く、面積の約7割が山林で占められています。京都府の最東端に位置し、東は三重県伊賀市、南は奈良県奈良市、北は滋賀県甲賀市に隣接し、古よりそれぞれ人・生活・文化の交流があります。中央を国道163号とJR関西本線が走っており、大阪・名古屋・京都市内から1時間30分程度で移動できることもあって、年々訪れる方々も多くなっています。

産業では、山々に囲まれた傾斜地

京都府 南山城村

みなみやましろむら



を活かした、村の特産品であるお茶が農業の主産業として栄えてきました。南山城村は、京都府では品質の優れた宇治茶の主産地として、京都府茶品評会においては煎茶の部で19年連続26回産地賞を受賞し、また関西茶品評会、全国茶品評会においても数多く受賞するなど、香りの高い良質な煎茶の産地として高く評価されています。

小さな村ではありますが、「南山城村の山なみ」をモチーフに「響」にこだわった故黒川紀章氏設計の文化会館「やまなみホール」が木津川沿いにあり、訪れる方々は木津川を臨みながら過ごす静かなひと時に、心を癒されています。大きな観光スポーツは少ないのですが、日本遺産にも指定された文化的景観「宇治茶生産



▲故黒川紀章氏設計の「やまなみホール」

景観―山なりの茶畑と山裾の農家」の美しさや全国的に珍しいアーチ動方式の高山ダム、京都府指定無形民俗文化財「田山花踊り」など、知る人ぞ知るスポットなどが多く、近年、地方への観光ブームも手伝って、ふらっと気軽に立ち寄れる南山城村は近畿圏のみならず全国からも多くの人が旅の途中に訪れています。

自然環境が豊かで交通網にも恵まれている南山城村であっても、全国的な少子高齢化、人口減少の波に逆らうことはできず、65歳未満の生産人口が減少しつつあります。

特産品のお茶を活かした むらづくり

南山城村の優秀な特産品であるお



▲道の駅「お茶の京都 みなみやましろ村」グランドオープン時の賑わい

茶においても農家数の減少や、人口減少による地域コミュニティの維持など多くの課題が山積している中、村民の一人ひとりが「何かを」「何とかしなければ」という想いが重なり、さらには村民の想いが一つになり、想いを形にしていこうという大きなうねりになってきました。

その結果、村民の皆さんが「誰が何をやりたいのか、担うのか」「誰が何をやっていくのか」「実際、担えるのか」など何回もワークシヨップを重ねて話し合い、「自分たちの期待や想いを形にかえてほしい」「自分たちがそれを担っていく」という強い意志のもと、道の駅「お茶の京都 み



▲道の駅オープン時のポスター

なみやましろ村」の創設に至ったところ。す。「京都府唯一の村」「南山城村の特産品のお茶」を特色として前面に出し、地域の農産物や、高品質の香り高い村のお茶、ワークシヨップに参加した村民が作る加工品など、数多く品揃えされています。

この施設は、目の前を国道163号が東西に走っていることからどこからでも訪れやすく、またロケーションとしては、茶畑が一望でき周りを山々が囲んでいるその様は、まさに道の駅「お茶の京都 みなみやましろ村」に相応しい風景といえます。

住民の想いが実現した道の駅「お茶の京都 みなみやましろ村」は、

農林産物の生産・出荷や加工品の開発販売など、村民の皆さんの当初からの熱い想いをそのままに、運営に参加していただいています。村民の想いが村を動かし、官民協働で成し得たこの道の駅は、地域活性化重要拠点として、さらには南山城村を「もっと知りたい」「もっと訪れたい」と思える観光振興の拠点としても位置付けられています。

村民の皆さんの想いの詰まったこの道の駅「お茶の京都 みなみやましろ村」は、平成29年4月にオープンし、また前年に開通した国道163号北大河原バイパスは1日約10,000台の通行量があることから、



▲移住交流スペース「やまんなか」での移住者と地元の方との交流ライブ

年間のレジ通過者が約40万人と、村が当初考えていた以上に大盛況で、一気に「京都府唯一の村 南山城村」という名前を覚えていただくきっかけになりました。「お茶の京都」と銘打つだけあって、村のお茶は勿論のこと、村のお茶をふんだんに使った抹茶ロールや抹茶ソフトなど、お茶を使った数多くの商品が並び、訪れる方は飽きることなく楽しめます。知名度が上がれば、自然と村に興味を持つ方も多くなり、訪れた方やテレビを見た方からの、南山城村に住んでみたいという声も多くなってきました。道の駅がきっかけで、京

都府唯一の村に惹かれて来てみたら、自然に囲まれた、ゆったりとした時間を過ごせたということです。

南山城村は、人口減少対策として移住定住事業に取り組み、空き家バンク制度の創設や移住定住推進員を置いて空き家の掘り起こしやマッチングをし、また民家を改修して移住交流スペース「やまんなか」を設置して移住された方と地域との交流を進めてきましたが、今や、移住したいと申し込む方が多く、空き家バンク登録件数が追いつかないほどの人気の村になってきています。

道の駅「お茶の京都 みなみやましろ村」のオープン以来、交流人口が増加し、また道の駅を核とした産業再生や、道の駅を公共交通網ルートに加えた買い物弱者支援のための地域内循環型システムの構築、高齢者支援AIの検討など、生活支援プラットフォームづくりなどが評価され、平成29年度には国土交通省「ふるさとづくり大賞」をいただいたところです。

次代に備える取組

高齢化が進む東西南北に広い村には、色々な情報を対話型で見える化



▲「三国峠」から南山城村が一望できます

する仕組みが重要と考え、「御用聞きAI」と銘打って、買い物難民対策や行政情報を伝える手段として活用できるか検討しています。現在は、防災行政無線、村内バス、三重県伊賀市と京都府笠置町・南山城村と圏域を超えた「伊賀・山城南定住自立圏」の取組として対話型で健康相談しながら、専門相談員につなぐ「救急・健康相談ダイヤル24」に接続できるよう取り組んでいます。

南山城村内にも幾つかの事業所がありますが、雇用という部分では生活圏である他市町へ行く方が多いのが実態でした。しかしながら地域活性化重要拠点である道の駅「お茶の京都 みなみやましろ村」ができた

ことで、村内は勿論のこと、またこれまでとは異なり村外からも雇用として入る方が増え、移住定住にもつながってきました。

南山城村はさらなる地域活性化を目指してきたところですが、道の駅ができたことによつて、隣接地に「道の駅ホテル」が2021年春頃オープン予定で建設されることになり、注目を集めています。雇用の拡大に期待するのは当然ですが、今年度から観光に特に力を入れていくという村の方針とマッチして、今後、村がつくる観光ソフトと併せ、通過点から着地点になる観光客や訪日客の増加に期待するとともに、消費拡大に



▲宇治茶の生産景観の縦畝と横畝からなる茶畑と一体となっている民家

も大きな期待を寄せています。

さらには、自然豊かな村にマッチした企業誘致を積極的に進め、菌床キノコ工場も建設される予定となっています。同じく雇用面にも期待をしています。村の農産物としての出荷という点にも期待しているところです。これらの企業誘致は雇用・観光・生産だけに留まらず、人口減少対策として、他所からの呼び込みの手段の一つとして、必ずや南山城村の活性化に寄与するものと考えています。

観光の振興という点では、地域の住民の方が体験型の観光を立ち上げ、村がサポートしていく形で取り組んでいくこととなっています。「人はどこから村へ来て、どこに行くのか」「村に来た人はどういったことを望んでいるのか」「どういったものに購買意欲がそえられるのか」などデータを集約化し、ニーズに合った新たな観光プラン・ソフトの開拓を行いながら情報発信をし、村の農林産物を活かした商品開発をさらに推し進め、観光消費を押し上げ、循環型産業施策として地元で還元できる仕組みをつくれるよう、総務省「地域ＩＯＴ実装事業」を導入して、村のありたい観光の姿の実現を目指しています。

南山城村からの発信

南山城村は、優秀な宇治茶の主産地としてのブランド力がありますが知名度は高くなく、近隣の三重県伊賀市・滋賀県甲賀市・奈良県奈良市が有名なため隠れた地域であったことは否めません。しかしながら道の駅「お茶の京都 みなみやましろ村」がオープンしたことを機に、「村を訪れる方」「村に興味をもたれる方」「村のファンになる方」が多く、さらには「道の駅ホテル」が建設されることも手伝って、「南山城村」の知名度



▲南山城村の中央をゆったりと「木津川」が流れています

も高くなりました。これから取り組んでいくＩＯＴを活用した事業も、村の観光ルート・スポットやお茶をはじめとする地元特産品などを全国発信し、道の駅のみに留まらず村の埋もれた魅力を再構築し、通過型観光から滞在型観光になっていけるように、さらには地元でフィードバックできる循環型産業を目標に、観光振興を進めていくこととしています。

今、南山城村は全国から注目され、以前とは比較にならないほど村を訪れる方は多くなりました。自然豊かな山々に囲まれ、村の中央をゆったりと流れる木津川の水面、村を走ればそこに茶園がある長閑な風景に旅の途中に来られた人は魅せられるのか、人口減少の中にあつて移住定住希望の方の問い合わせも年々増加しており、近畿圏のみならず全国から、長閑な田舎で、昔と変わらない隣近所が声を掛け合える南山城村に住みたいとの声に、将来への希望を感じています。

また優秀な宇治茶の主産地というブランドを基本として、道の駅「お茶の京都 みなみやましろ村」がオープンしたことにより、南山城村のお茶の知名度・魅力を一気に高めると同時に観光スポットとして脚光を浴び、「道の駅ホテル」の建設も予定さ



▲木津川を横断している「恋路橋（潜没橋）」

れ、どこに行っても「南山城村」と話すとうれしい反応があります。

南山城村は、人口も少なく少子高齢化が進んでいる小さな村ですが、一番の魅力は村民である「人」です。これまでの「静」から、村民自らがコトを起し、モノをつくり、想いをつなげていくという、「動」の流れになってきています。これからもお茶や観光をはじめとするモノの魅力だけでなく、人と人とのふれ合いをもっと輝かせられる「魅力ある村づくり」に、村民の方々と一体になって取り組んでいきたいと考えています。

南山城村 むらづくり推進課

(令和元年7月29日付第3000号)

▼転がる石が心地の良い音を奏でる鳴り石の浜



地域資源を生かしたまちづくり ～鳴り石の浜プロジェクト～

琴浦町の概要

南に中国山地の秀峰大山、北には日本海の水平線が続き、鳥取県のほぼ中央に位置する琴浦町は、県の東西の空の玄関である「鳥取砂丘コナシ空港」「米子鬼太郎空港」まで、どちらも車で1時間ほどの場所にあります。

平成16年9月に二町が合併して総面積139・97km²、人口およそ1万7千人の琴浦町が誕生し、今年15周年を迎えます。人口最少県の鳥取県の中で、町村では人口のもっとも多い町ですが、山と海の両方の恵みを享受する自然豊かな町です。

かつて、その海岸線が「琴ノ浦」と呼ばれていたの言い伝えから名

鳥取県 琴浦町 ことうらちょう



づけられた琴浦町は、太平記に記された後醍醐天皇の合戦の舞台となった国立公園「船上山」や、白鳳時代の寺院跡「斎尾廃寺跡」など多くの歴史的遺跡や建造物を有し、歴史や文化の薫る町でもあります。

産業では、二十世紀梨やミニトマト、ブロッコリー、芝などの農業のほか、週刊誌に「日本一老けない牛乳」として取り上げられた「白バラ牛乳」ブランドの高品質の乳製品や、数々の受賞歴のある「東伯和牛」など、酪農や畜産も盛んです。また、漁港も有し、新鮮なトビウオから作る「あごちくわ」は特産の一つで、食文化が豊かな町です。

平成26年に地方創生に先がけて人口減少対策をまとめ、心豊かな琴浦での暮らし、「コトウライフ」をキャッ



▲海辺に咲くひまわり

チコピーとして取り組んできました。平成27年度には「琴浦町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、それまでの人口減少対策を引き継いで、地方創生の取組を進めています。

ひまわりが揺れる海岸

昨夏は例年になく猛暑が続く、ニュースでは毎日、最高気温が話題となりました。そんな中で、鳴り石の浜のひまわり畑が昨年も満開となりました。

このひまわりは、この海岸を拠点として地域活性化に取り組む団体「鳴り石の浜プロジェクト」が6年前から育てているもので、海を背景に咲くひまわり畑は全国的に珍しいと、

今では多くの人を訪れる観光スポットとなっています。

この鳴り石の浜プロジェクトは、さまざまなアイデアと発信力で人を巻き込み、呼び込みながら次々と新しい取組を展開し、町の魅力を全国に発信している、元気な地域活性化団体です。

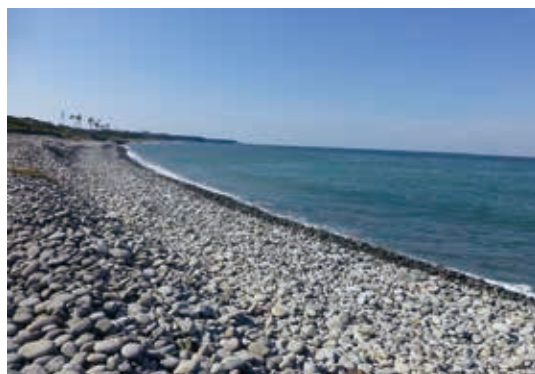
危機感から団体結成へ

町の中央を走る国道9号沿いは、かつて商業や地元グルメの店舗などが集まる中心地でした。平成23年2月、町を横切る山陰道東伯中山道路が開通し、便利にはなったものの国道9号の交通量は激減し、それに伴って沿線の店舗は売り上げが減少、廃業する店舗も出始めました。

そんな時、「このままでは町が大変なことになる！」と思った住民有志が、民間レベルでできる地域活性化の手法を模索し始め、平成23年6月、「鳴り石の浜プロジェクト」を立ち上げました。

地域に埋もれていた宝

町の西側に、東西約500mにわたり、大小の丸い石が敷き詰められ



▲当たり前の風景が町の宝に

たような自然海岸が残っています。これらの石は古期大山の噴火でできた安山岩が、何万年もの間に波にもまれてぶつかり合い、堆積したものとされ、波打ち際で「カラコロ」と心地よい音が鳴る珍しい現象から、「鳴り石の浜」と呼ばれています。

地域の隠れた食文化を発信する「B級グルメ」のように、「そこにしかない地域の宝」を見つけ出し、その魅力を発信することによって地域活性化につながる方法があります。しかし、どんなに素晴らしいものでも、毎日見ていると慣れてしまつて、その価値に気づかぬまま埋もれてしまふものも多いと思います。

鳴り石の浜も、地元の人はどこに



▲小学校での出前授業

でもある普通の海岸と想っており、8年前まで誰も行くことのない寂しい海岸でした。鳴り石の浜プロジェクトは丸い石が海岸を埋め尽くす景観や、波に洗われて音を立てるこの浜独特の現象が、全国的に見ても非常に珍しいということに気づき、ここを舞台にしたイベントや情報発信などの活動を始めました。その活動のベースにあるのは、地元の自然を大切に、後生に残していきたいという強い思いです。日々の清掃などの保全活動はもちろん、地元小学校を訪問してふるさとの素晴らしさを伝える出前授業など、その取組は地元新聞にも度々取り上げられ、

地域に活力をもたらしています。

アイデアあふれる取組

鳴り石の浜プロジェクトは、特にプロジェクトの中心となるリーダーたちの企画力と行動力が素晴らしく、お金がなくてもできる独自の取組をしています。

例えば、きれいな波音が「よく鳴る」ことから、物事が「良くなる」というダジャレを思いつき、幸運を呼ぶ浜（パワースポット）として発信。海岸にある石に願いごとを書いて海に投げると願いが叶うといわれる「石絵馬」は、訪れた方の楽しみになっています。

また、「鳴り石の浜のひまわり畑」は、東日本大震災で被災した岩手県陸前高田市から送られたひまわりの種を使い、地域の人に愛着を持ってもらうため、地元の小中学校の子どもたちに種から苗まで育ててもらっています。近くにある特別支援学校の生徒にも呼びかけて、近隣の住民と共に海岸の畑に植え替えをして、帰省客が増えるお盆の時期に咲くように計画して育てています。

そうした地域を巻き込んだ取組に関わった子どもたちが、将来地元に戻っ

次は「インスタ映え」

鳴り石の浜は、その波音だけでなく、5月から8月まで、水平線に夕日が沈む「夕日スポット」でもあります。これも地元では当たり前前の風景でしたが、「夕日の写真コンテスト」を企画したところ、町内外から海に沈む夕日を撮影するため訪れる人々で賑わったうえ、作品を見た地元の人もふるさとの美しさに改めて気づくことができました。



▲(上) 願いごとが叶うかな!?
▶(右) 地域の人たちとひまわりの苗植え



最近の仕掛けでは、ストーンバランシング（バランスよく石を積んでアート作品を作る遊び）を楽しめる場所として発信を始め、今ではフェイスブックやインスタグラムなどのSNSに、海外からも含め、たくさん写真が投稿され、新たな魅力の一つとなっています。

このように、鳴り石の浜プロジェクト



▶夕日に輝く鳴り石の浜



▲大人も子どももハマるストーンバランシング

クトは、ただ海岸を眺めるだけでなく、実際に自分で触れて体験し、参加するなど、いろいろな楽しみ方を次々と提案し、訪れてみたいと思える魅力を発信し続けています。

そして、SNSなどによりその魅力を拡散させ続けており、平成27年度には国土交通大臣表彰「手づくり郷土賞」、平成28年には総務大臣表彰「ふるさとづくり大賞」を授賞するなど、その取組も評価されています。

楽しいからこそ続けられる

地域活性化は、組織結成時の思いや勢いを継続させるのが難しいものですが、鳴り石の浜プロジェクトの

継続の力半は「楽しむこと」です。

はじめは「地域のために」という気持ちが強くあっても、毎回参加させられると「やらされ意識」となり、不満も増して活動が続きません。「ボランティアはそれぞれがやりたい気持ちの時にできる人でやればいい」という考え方に気づいてからは、中心メンバーも気持ちがあつて活動をより楽しめるようになり、今もイベントなどを開催する時は「この指とまれ方式」で、その都度参加できる人を募集して実施しています。その方がお互いに気楽に続けられ、結果的にプロジェクト自体も長く続いていくようで、メンバー自身が楽しみながら、力を持ち寄って楽しくやっている、そういう雰囲気大事にしています。

まちづくりは、多くがボランティアです。町を元気にしたいという思いのある人が集まり、小さな取組から大きなイベントまで、それぞれの活動を行ってください。そこでは時間と労力、時にはお金をかけて取り組まれており、「ひとのちから」のありがたさを感じます。

ではありませんが、楽しみながら町を元気に、と思う人たちが増えると町の活力にもつながっていくと考えています。

新しい「コト」。 熱中小学校開校

いま琴浦町が、重点施策の一つとしているのが「ひとつづくり」です。人口減少・高齢化が進む現代において、一人ひとりの力を高めることこそが町の活力につながると考えています。――社会が急スピードで進んだとしても、それを扱うのは「ひと」であり、また、地域の将来を支え、考え行動していくのも、そこに住む人たちです。地域の活性化に向けて、自分たちで考え、行動できるリーダーが育つことが、町にとっても財産となります。

そのために、新たな刺激や知識を学ぶ場として、「とっとり琴浦熱中小学校」を昨年の10月27日に開校しました。これは、全国12の自治体が連携して取り組む地方創生事業ですが、各分野の第一線で活躍する方々が講師となり、空き校舎などを活用した全国「熱中小学校」で授業を行う大人の学びの場です。ここでは、授業の中から生徒と講師が相互に関わり、



▲中国地方初！とっとり琴浦熱中小学校開校

交流の中から何かをやってみよう、という熱を生みます。そして、その熱が地域に広がり、新たなチャレンジが生まれることを目指しています。町内だけでなく、県内外からも生徒が集まるこの事業は、いま注目の「関係人口」の創出にもつながるものと期待しています。

コトウライフのこれから

琴浦町の地方創生の力半は「ひと」であり、ここに暮らすさまざまなひとの思いや活動の中で、町に活力をもたらししていきたいと考えます。

町を盛り上げようと活動する「ひと」。外部からの視点で新しい風を吹かせてくれる「ひと」。ここでの暮らしを楽しむ「ひと」。町の外から気にかけてくれる「ひと」。琴浦町に関わる一人ひとりが輝くことこそが、町全体が活力を維持し、輝くことにつながっていきます。

心も暮らしも安心・安全を基本としながら、新たな人の絆や交流から「ひとつづくり」を進め、5年後に二十歳を迎える琴浦町が、よりいっそう輝きに満ちた町となるよう、今後もしっかり組んでいきたいと考えています。

琴浦町長 小松弘明

(平成31年2月18日付第3070号)



▲人と町がつながる「コトウライフ」

▼津和野城跡から見下ろした城下町。秋、雲海が晴れると街なみが現れる。



ゆつくり街歩き、
地域の文化歴史資源を活用した滞在型観光まちづくり、
本当の津和野の魅力を伝えたい。

津和野町の概要

津和野町は島根県の最西端に位置し、県境で山口県に接しています。島根県庁の所在地である松江市までは200kmで、SLやまぐち号が走るJR山口線、山陰の幹線道である国道9号線と岩国につながる国道187号線が交差し、古くから山陰と山陽をつなぐ交通の要所として栄えました。

面積は約307km²、東京23区の約半分と広く、総面積の91%を山林が占め、令和元年7月末現在の人口は7,333人、世帯数は3,506世帯（住民基本台帳）となっています。平成17年、旧津和野町と旧日原町が合併し、新津和野町となりました。津和野地区は津和野城跡から望む中心部に城下町の風情を色濃く残し、

島根県 津和野町

つわのちょう

文豪森鷗外や思想家西周など明治維新を支えた先人を数多く輩出した、歴史と文化が香る「山陰の小京都」として有名です。観光客入込数とし



清流高津川の天然鮎かけ



ては昭和54年に150万人を超えたときをピークに、その後減少に転じましたが、今でも90万人の観光客が訪れる県西部最大の観光地です。

日原地区は古くから天領として栄え、一級河川水質日本一に6度輝いた清流高津川が流れており、良質な天然鮎やツガニ漁も盛んで、ミシュランガイド東京の一つ星を獲得したこともある料亭の本店も拠点を構えています。また、ブナの原生林が広がる島根県内最高峰、安蔵寺山の水系を中心にわさび、タラの芽など山菜の栽培も行われ、天然のイノシシ肉など山川の恵みも数多い自然豊かな地域です。

日本遺産第1号認定 「津和野今昔百景図を歩く」

「地域の文化歴史資源を活用した滞在型観光まちづくり」という観点から述べますと、最近では平成27年4月、文化庁が新たに制定した「日本遺産」制度の第一号認定18地区のひとつとして、本町の「津和野今昔百景図を歩く」が認定されたことがあげられます。日本遺産とは、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを評価するものです。

「津和野今昔百景図を歩く」は、幕末の津和野藩の風景等を記録した絵図「津和野百景図」にある藩内の

▲津和野百景図「十七祇園會鷺舞」江戸末期の様子(上)、現在の様子(下)



名所、自然、伝統、芸能、風俗、人情など、絵画と解説100枚から物語が始まります。明治以降、不断の

努力により町民が開発から街の風情を守るとともに、新しい風潮に流されることなく、古き良き伝統を継承してきたこと。さらに、百景図に描かれた当時と現在の様子を対比させ

つつ、往時の息吹を感じ、街なみを散策できるストーリーを評価していただきました。これは、決して百景図、そのものが日本遺産ではないという

ことなのです。

しかし、その一方で日本遺産の認定は単純に前述のストーリーだけではなく、甚だ手前味噌ですが、戦略的に積み上げてきた町の取組があったこそ実現したといえます。

文化歴史資源を多層的に 活用する体制の構築

まず、町教育委員会では平成20年から、道ばたの地蔵に至るまで、データを蓄積させた文化財の総合的把握

を行い、平成22年、「津和野町歴史文化基本構想」を策定しました。続いて平成25年、津和野地区の貴重な城下町の街並みを面的に保存整備活用する計画として、「津和野町歴史的風致維持向上計画」の認定を受けました。現在、日本遺産の認定には、歴史文化基本構想もしくは歴史的風致維持向上計画の策定が必須条件となっています。

同じく平成25年、城下町津和野、橋北地区において、歴史的な街並みを保存すべく、「重要伝統的建造物群保存地区」の選定を受けました。このようにさまざまな計画策定により多層的に整備を行う体制を整え、歴史的建築物を保存活用できることとなりました。

民間から起こった 空き家対策の動き

この気運はやがて民間からも起こることとなり、平成22年、町商工観光課に対して若手商工業者有志から「空き家の増加、老朽家屋の倒壊について対策を講じたい」との協働の打診がありました。その後、京都の建築コンサルタントを交えて、ワーク



◀町家ステイ戎丁 改修前（右）、改修後（左）

シヨップなど検討を進め、平成24年2月、官民協働による「津和野町まちなか再生推進協議会」が発足することとなります。

同協議会の活動は「空き家等を活用することで、観光等に資する施設を整備すること。また、体感プログラムを商品化することで、観光客が町内を回遊し、長時間の滞在を目指す、観光サービスの運営体制を確立すること」を目的としました。

本町の観光における弱点は、まさに今も昔もこの滞在時間の短い通過型観光であるということなのです。中堅旅館等の廃業や労働力不足による自主規制など宿泊可能総量の減少もあり、全町では年間100万人を超える観光入込客がありながら、宿泊客数は3万4千人弱であるという数字が、それを如実に表しています。

そこで、まず取り組んだのは、空き家を改修整備し、観光客に一棟貸しする新たな宿泊システム、町家ステイの具体化でした。候補物件を探す空き家調査、さらには新聞折込み等による公募を行い、複数の候補物件を選定、同協議会の中で活用案を議論しました。しかし、私有財産に公的資金を投入するうえでの貸借条件、宿泊業者との調整、物件に関する所有者、周辺住民の思い入れなど議論は長期に及び、時には地域の反発もあり、計画が頓挫した物件もあり

ります。

（二社）町観光協会が運営する町家ステイ

第一号物件は社会資本整備総合交付金の空家再生事業を活用し、平成25年に改修工事に着手。しかし、昨年制定された民泊新法の議論に先んじた、住宅の一棟貸しと旅館法との



▶町家ステイ上新丁 居間から庭の風景

解釈に相違が生じたため、関係機関と協議し、追加修正を行う必要もありました。そんな紆余曲折を経て、第一号の「町家ステイ戎丁（えびすちょう）…5名定員」は平成27年2月にオープンする運びとなったのです。

開業に向けては、指定管理者を町観光協会へ委託することで利益を広く観光振興に活用すること、旅館法の簡易宿所の認可を受けること、泊食分離を原則とし町内飲食業への波及効果を狙い、かつ宿泊料を高価格帯に設定することで、既存の宿泊業者とはかぶらない、新たな顧客層の発掘を目指しました。

平成28年には第2号物件「町家ステイ上新丁（かみしんちょう）…10名定員」がオープンし、現在2棟の運営を行っています。高価格帯ながら、とても古い住居とは思えないハイスパックなモダン和風テイストと、スタッフのきめ細かな対応もあり、最近ではリピーターも増えてきました。間接的経費を含めると利益が生まれるまでには至りませんが、平成30年度実績で宿泊者数328名、2年連続前年度比150%を超える増加となり、津和野旅館組合にも加入するなど観光協会事業収入の一角を占めるまでになりました。

空き家活用と図書館移転による 賑わい創出拠点「かわべ」

その後の取組として同協議会から派生した官民協同組織により、平成26年より日原地区の中心商店街に賑わいを取り戻すため、古民家母屋・蔵3棟を改修した多目的施設と図書館・カフェ棟の移設・新築による拠点エリアの構想がスタートしました。町家ステイと同様に社会資本整備総合交付金の空き家再生事業を活用し、さらに地方創生推進交付金事業、農山漁村振興交付金の農泊推進対策事業、過疎債など事業実施に導入しています。

こうして、本年9月1日、清流高津川に隣接した日原にぎわい創出拠点「かわべ」は本格的なオープンを迎えることとなります。観光地である津和野地区とは異なり、地域住民を中心とした日常的な活用と幹線国道からも展望の効く地の利を生かしたイベント等の非日常的な活用により、域外との人的・経済的な交流を目指した運用を考えています。現在、城下町「津和野地区」と天領「日原地区」、さらにもう一つの天領「畑迫地区」をつなぐ観光プランを創るため、実証実験、サイン整備も継続的に進行中です。

文化歴史資源を活用し 通過型観光からの脱却

また本町の歴史遺産の一つである乙女峠はキリシタンの殉教の地として有名であり、毎年5月、津和野カトリック教会の信者が中心となって「乙女峠まつり」を開催し、全国の信者などたくさんの参列者が訪れます。



▶「かわべ」プレオープン イベント
高津川ミズベリング

このたび、乙女峠において明治政府による改宗政策の弾圧により殉教した37名の信者に関して、信仰の高さとその聖性を認めるため、バチカン市国にあるローマ教皇庁より列福・列聖調査の開始許可がおりました。今後、調査と審査を経て、認定が確実視される中、正式に決定すると、津和野がカトリック教による「聖地」の一つとして世界に認知されることとなります。認知された後は、全世界から多くの信者が巡礼の旅に來町されることが予想されるため、インバウンド対応のインフラ整備やおもてなしの向上がさらに必要となっております。

このように地域の文化資源を活用した滞在型観光に取り組むべく、宿泊機能の向上や日本遺産を核とし、日本遺産コンシエルジュ・ガイドの育成、四季折々のさまざまなまち歩きプラン、体験プランの開発も急がねばなりません。

こうして、津和野町観光の弱点である滞在時間の短さ、通過型観光を克服し、ゆっくり滞在したいと考えている、本町の津和野の魅力伝えていきたいと考えています。

津和野町長 下森 博之
(令和元年10月14日付第3097号)

▶キリシタンの歴史遺産「乙女峠」が 世界的な聖地に・・・



参考

- ・津和野町日本遺産HP
(<https://tsuwano100.net/facility/>)
- ・(一社)津和野町観光協会町家ステイHP (<http://tsuwano-stay.jp/>)
- ・日原にぎわい創出拠点かわべHP (<https://nichiharakawabe.jp/about/>)

▼高山からの展望

周防大島町には理想の 島暮らしがある

「ひと」や「しごと」の流れを定住に
つなげる

周防大島町の概要

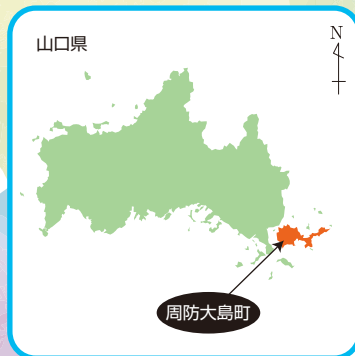
周防大島町は、本州の最西端山口県の東南部に位置し、瀬戸内海では淡路島、小豆島について3番目に大きな島です。大島瀬戸を渡る大島大橋（全長1,020m）によって本土と連結しており、最寄のJR大島駅までは車で5分と、日本一鉄道の駅に近い島です。年間平均気温は15・7℃と年間を通じて比較的温暖であり、島の海岸道路から望む、穏やかな瀬戸内海に浮かぶ多島美や白い砂浜、四季の彩り豊かな自然が心を癒してくれます。

特産のミカン、本町が山口県の生産量の80%を占めており、さまざまな品種を栽培することにより9月から翌年の6月まで出荷することが可能となっています。

2004年（平成16年）10月1日に

山口県 周防大島町

すおうおおしまちょう



「島を想う心は一つ」を合言葉に島内の4町が合併し、周防大島町が誕生しました。

合併時には2万人を超えていた人口も、現在では1万6千人まで減少し、高齢化率も53%を超えており、少子化対策と人口減少の抑制が重要な課題となっています。

このような状況の中、町では交流人



▲大島ミカン「島そだち」

口を増やし、交流から定住へとつながる地方創生の取組を進めています。

瀬戸内のハワイ

周防大島は、瀬戸内のハワイといわれていますが、その所以は、温暖な気候に加え、明治の官約移民の歴史にあります。明治18年から27年までの10年間に官約移民として日本から約3万人がハワイに渡りましたが、その内3、913人が周防大島から渡航しています。その後も移民が禁止される明治後半までに周防大島からは多くの者がハワイに渡航しており、契約の終了とともに日本に帰ってきた者もいますが、多くが移民としてハワイに残り、今日のハワイ日系社会の礎を築いています。

そのような歴史背景があり、1963年（昭和38年）6月22日に、人口も風景も、また人情豊かなことも周防大島に類似しているハワイ州カウアイ島と姉妹島縁組を締結し、以来半世紀以上もの交流が続いています。

1986年（昭和61年）に始まったアロハシャツを役場の夏の制服とするアロハキャンペーンは、当初こそ派手なアロハシャツを着た役場職員に少々驚きもあつたようですが、今ではあたりまえになっており、島内の銀行・郵便局・農協・観光施設等の職員もアロハシャツを着用し周防大島の夏を彩ります。

ハワイを代表するフラダンスですが、夏場の土曜日に行われるサタデーフラダンス、略して「サタフラ」が、今では周防大島町の夏の風物詩となっています。シーズン中、延べ130組、3、500人ものフラガールが遠く県外からも参加されています。カウアイ島をモチーフとした宿泊滞在施設「グリーンステイながら」、道の駅「サザンセトとうわ」など町内4会場で、砂浜や芝生をステージにして華やかなフラドレス、フラTシャツに身を包むと、若いも若きもアロハな気分になります。

参加者の方々からは、「シーサイドドライブを兼ねて瀬戸内のハワイの



▶ サタデーフラダンス

フライイベントに参加するのを楽しみにしている」という評価をいただいています。

ニホンアワサンゴを育む海

周防大島の南東部の白木半島沖で日本最大規模のニホンアワサンゴの群生地（2、000㎡、4万個体以上）が発見されました。これだけの規模の群生地は国内では他に類を見ないそうです。ニホンアワサンゴは東南アジアの固有種で、日本、韓国、中国に生息する温帯性サンゴです。

日本では、鹿児島県種子島から千葉県房総半島までの太平洋側と、長崎県から島根県の日本海側に生息しています。個体は丸い骨格とそこから伸びた多くのポリプでできており、ポリプの先には手のひらを広げたような形の触手があります。さらにこの海域にはクロメヤホンダワラ類の海藻群落及び多くの魚種、サンゴ類が確認されるなど優れた海中景観を有しています。

この貴重な海中景観を保護するため、2013年（平成25年）2月28日にニホンアワサンゴの群生地を含む56・4haの海域が、瀬戸内海では初めてとなる「海域公園地区」に指定されました。

ニホンアワサンゴについて学ぶエコツアー等も実施されており、ニホンアワサンゴを周防大島の大切な財産とし



▲ ニホンアワサンゴ

て「守る・広める・学ぶ・活かす」取組と、推進拠点となる施設の整備を進めています。

交流人口の拡大に向けて 体験型修学旅行の誘致

広島、山口の瀬戸内海沿岸地域における代表的な修学旅行として、広島での平和学習や宮島での世界遺産めぐりがありますが、周防大島町では2008年（平成20年）から、これらのコースと組み合わせた民泊体験型修学旅行を誘致しています。昨年度は、東京、神奈川、埼玉、京都、奈良、大阪の中学、高校30校の修学旅行生、計4千名あまりを受け入れています。この民泊体験修学旅行では、民家に3〜4名のグループで宿泊（ホームステイ）することにより、民泊先の農業や漁業などの家業を体験するだけでなく、素

朴で温かい人情のある島暮らしを体験することが出来ます。

民泊の受け入れには手間も時間もかかりませんが、本物の体験から得る新鮮な感動と貴重な体験を都会の子ども達に与えるばかりではなく、高齢者の多い受け入れ家庭にとっても生きがいとなっています。また、子ども達にとっても民泊での体験は忘れがたいものとなっているようで、大学生や社会人となり、友人を誘い再び周防大島町を訪れてくれるということもあります。

民泊受け入れ家庭の高齢化も進んでおり、受け入れを続けることが困難となる家庭も出てきていますが、本町に都会から移住される方が増えており、そうした方々が新たに受け入れ家庭となってくれています。



▲獲った魚で夕食づくり

年間80万人台であった観光交流人口は、夏場の海水浴やオートキャンプに加え、サタフラや体験交流型観光が起爆剤となり、2016年（平成28年）に100万人を達成しました。今後は、町の基幹産業である農業や漁業などの1次産業と観光交流を結びつけた更なる賑わいをつくります。

交流から定住へ 「定住促進協議会」の設立

交流人口を定住人口につなげようと、2012年（平成24年）に町内の経済団体と共に周防大島町定住促進協議会を設立しました。移住先の候補に挙げてもらうには、まず周防大島町を知ってもらわなければなりません。周防大島の知名度は低く、伊豆の大島、奄美大島は知っていても周防大島の名前はなかなか出てこないのが現実です。

知名度UPのため、全国で開催される年間15カ所の移住フェアへの参加、年3回の移住体験ツアー「島時々半島ツアー」の開催、お試し住居、空き家バンク等に取り組んできました。

「島時々半島ツアー」では、移住希望者をお客様扱いしません。観光名所めぐりは一切せずに、実際に生活していくうえで大切となる「島の医療の実情紹介」、「島の買い物」、「先輩移住者との交流」や、ファイナンシャルプランナーによる「島の家計講座」がメインとなっています。

年度	移住相談件数	移住世帯(人数)
平成24年	51	5 (20)
平成25年	49	8 (25)
平成26年	82	10 (28)
平成27年	117	21 (47)
平成28年	216	11 (27)
平成29年	476	12 (27)
計	991	67 (174)

▲移住者数の推移

平成27年の「全国移住ナビ」プロモーション動画コンテストで総務大臣賞をいただいたことや、「民泊体験型修学旅行」、「サタフラ」などの取組で少しずつ町の知名度も上がり、「瀬戸内海」の魅力に惹かれ移住相談に訪れる方も増加しています。

周防大島町では、正確な移住者の数は把握していません。これは、「数字を追いかけない」、「もてなさない」、「補助金を出さない」という定住促進協議会の方針に基づくものですが、定住促進協議会を通じて移住された方は、平成24年度から29年度までの間に67世帯174名となっています。

行政とは別に先輩移住者が新たな移住者を支援する活動ともあいまって、移住者が移住者と呼び込む動きが広がっています。また、移住者が起業する事例も増えてきており、島



▲移住者による6次産業（島の柑橘を使ったジャム・マーマレード年間170種類）

雇用の場の創設 「チャレンジショップ」等

新たに起業を目指す方を支援するため、「道の駅サザンセトとうわ」に、2011年（平成23年）にチャレンジショップ5店舗をオープンしました。このチャレンジショップは、安価な賃料で3年間（最長6年間）、集客力のある道の駅で起業に向けたノウハウを習得することが出来ますので、出店者の中から町内で起業をする方も出てきています。チャレンジショップは、観

の1次産業の産品を加工し販売まで手掛ける6次産業化への取組が盛んになっています。



▲道の駅に併設されたチャレンジショップ

光拠点の更なる交流と賑わいの場にもなっています。

また、町内での就業の機会を増やし移住を促進するため、山口県と連携してICT関連企業等のサテライトオフィスの誘致に取り組んできました。2011年（平成23年）の地上デジタルテレビ放送の開始に伴う難視区域の解消のため、町内全域に整備したケーブルTVの光ファイバー網によって高速通信が可能になったことにより、廃校や古民家を活用して、これまで2つの企業がサテライトオフィスを開設しています。

住環境の整備

「若者定住促進住宅用地等」

人口減少と少子高齢化が進展する中で、町の活力やコミュニティを維持す



▲若者定住促進住宅用地

るためには、子育て世代の定住が不可欠です。しかし、町内には空き家は多くとも空き家バンクへ登録していただけの物件は少なく、また、若者世帯が住宅を建築できるような用地も少ないのが現状です。

若者世帯の転出の抑制及び転入の促進を図るために、1次産業や観光業に従事する若者世帯が多い地区に、未活用の町有地（庁舎跡地）を活用し「若者定住促進住宅用地」5区画を本年度整備しました。1区画の面積は約100坪で、若者世帯が利用しやすい安価な貸付料とし、10年間住み続けた後は無償譲渡することになっています。

また、子育て世帯の定住を促進するため、本土への通勤・通学に利便性のある大島大橋の近隣地区に、子育てが

終了するまで安価な賃貸料で住み続けることができる「子育て定住促進住宅」を建設中です。

誰もが主役になれる町へ

2018年（平成30年）は色々なニュースで周防大島町が全国に知られる年になりました。

お盆には、スーパーボランティアがやってきて、あつという間に行方不明の男児を発見し、9月には、大阪の警察署から脱走した逃走犯がやってきて、あまりにも居心地が良かったのか、道の駅や温泉施設などで1週間以上も滞在しました。10月22日未明には、高さ40mの外国船籍の貨物船がやってきて、島民唯一の交通手段である高さ30mの大島大橋に衝突するという、通常では考えられない事故が起こりました。

この事故により、大島大橋に添架されている水道送水管と通信ケーブルが破断し、橋自体も大きな損傷を受けました。橋の通行もままならず、風速が5mを超えると全面通行止めとなり、また、全島での断水が40日間も続き、町民は不便な生活を強いられ、島の経済は大打撃を受けました。

この間、他の市町からの給水応援や温浴施設の無料開放などの温かいご支援をいただき、地域においても井戸水の提供やお風呂の貸し借りなどの助け



▲大島大橋損傷の全景

合い・支え合いが行われました。

現在は大島大橋も水道も応急復旧され日常の生活を取り戻しつつありますが、大きな混乱もなくこの難局を乗り越えられたのも、過疎地域ならではの住民の絆があったからではないかと思っています。

大島大橋貨物船衝突事故で激減した観光のお客様を呼び戻すべく、良いことで周防大島町の知名度が上がるよう、瀬戸内の魅力と人情を観光資源として、「ひと」や「しごと」の流れを定住につなげ、「誰もが主役になれる町」づくりに取り組んでまいります。アロハな周防大島町に是非お越しください。

周防大島町長 椎木 巧
(平成31年3月11日付第3073号)

▼清流川辺川と雨宮の森



相性が良くなる村で進める 豊かな村づくり

相良村とは

熊本県の南部に位置する相良村は、豊かな自然に恵まれ、古い歴史と伝統が息づく人口約4,600人の小さな農山村です。北部は、標高400mから1,300mの山岳が連なっており、山岳を形成しています。

また、村の中央には川辺川かわべがわが北から南へ貫流しています。国土交通省により、平成18年調査から13年間連続で、最も水質が良好であると評価された清流です。村の中流域から下流域にかけて平野が拓け、水田や畑が広がる典型的な農業地帯となっています。

産業は農林業が主で、特産物は、米・茶・栗・いちご・メロンなどです。その中でもお茶は、県内一の生産量を誇り、村人が800年以上も前から守り継いできた村の宝です。

熊本県 相良村

さがらむら

相良700年の歴史
(日本遺産認定)

相良村を含むこの人吉球磨地域(10市町村)は、鎌倉時代から明治維新までの約700年間にわたり、「相良氏」



▲十島菅原神社 (国指定重要文化財)





▲恋人の丘

相性が良くなる村

が治めた全国でも珍しい地域です。相良氏は民衆の文化を尊重しつつ、寺社に都の建築様式を用いるなど新たな技術も取り入れ、歴史的・文化的価値が高い社寺や仏像は信仰の対象として大切に受け継がれてきました。

この「相良700年」に受け継がれた文化財や風習、地域の歴史を結びつけて紡がれた物語（ストーリー）が、日本の文化・伝統の魅力を伝えるものとして、2015年度に熊本県第1号の日本遺産に認定されました。

に川村と四浦村の2つの村が合併する際、「相携えて良くなるように」との思いが込められて名付けられたものです。

相良村では現在、村自体のブランド化（自治体ブランド化）を図ることで、農産品など村の資産の価値向上や地域活性化を目指しています。村としてブランド化を進めるにあたり、統一感を持たせるために用いているのが村名にちなんだ「相性が良くなる村」というキャッチコピーで、「愛」をテーマにした村づくりを進めています。

もともと村内には夫婦橋や夫婦杉、恋人の丘など、愛にまつわる名所が点在しており、よく見ると村の地形も縦長のハートの形をしています。

相良村の「相良」は「愛」を意味します。「愛」は男女だけでなく、親子、友人、事業者同士の関係なども含むものです。

村人の「愛」が本物の宝物をつくりだす

相良村ではブランド化事業の一環として、2016年度から講師を招いて商品開発会議を開き、相良ブランドの新商品のコンセプトやPR方法を考える村の事業者を支援しています。会議では、アクティブラーニング（能動学習）の手法を商品開発に取り入れ、さらに他事業者とのコラボで新たな価値を生み出しています。会議を重ねるごとにアイデアに磨きがかかり、これま



▲商品開発会議でコラボの可能性を探る参加者

でない村の宝物が次々と誕生しました。

ブランドの確立を目指すうえで目標にしたのが、地域の特産品や素材を利用した商品の魅力を競う「にっぽんの宝物コラボグランプリ」への挑戦です。

参加した事業者は、このグランプリを通じて出会った全国の事業者と積極的にコンタクトをとるようになりました。その「出会い」がきっかけとなって、お互いの知識を吸収し、自分の商品に磨きをかけ、そのひとつひとつが本物の村の宝物へとつながっていきました。

その結果、商品開発を始めてわずか1年あまりでしたが、シンガポールで開催された、外国人が審査する「にっ



▲フランスの中央に位置するセント・ヴァレンティン村

ぽんの宝物グランプリ世界大会」で、見事相良村のお茶がグランプリを獲得するという快挙を成し遂げました。

さらに、相良村では国境を越えた地域と地域の結びつきも進めています。それが、フランスの「セント・ヴァレンティン村」との交流です。

一通のメールが物語の始まり

2013年に「相性が良くなる村」のコンセプトを掲げてから2年、これまで夫婦橋や恋人の丘など「相性が良くなるスポット」のPRや、ブライダル事業との提携などを行ってきました。メディア露出が増え認知度は一気に高まりましたが、もうひと押し、新たな起爆剤となるものが必要と感じ、「愛」をテーマにした海外との連携を模索し始めました。

そのような時、運命的に出会ったのが、フランスの中央に位置し「フランスのハート」と呼ばれるセント・ヴァレンティン村です。

広大な平野にたたずむ小さな村

ヴァレンティン村の人口は300人弱、広さは村の両端を、歩いて15分ほどで行き来できます。しかし周辺に広大な平野を有し、春には菜の花、夏にはヒマワリが咲き誇ります。その花々の油や、フランスの家庭料理でよく使われるレンズ豆を主に生産しています。

世界中の「愛」が集まる村

村名の由来は、キリスト教における恋人たちの守護聖人、聖ヴァレンティンの遺物が12世紀に発見されたことから。これを受け、村では「愛」を柱に村づくりが行われています。

村の随所に「愛の画家」レイモン・ペイネの壁画などが見られ、愛にあふれる景観を演出しています。また、毎



▲ハートがいっぱいのヴァレンティン村

年2月に開催され、来年で56回目を迎える「ヴァレンティン祭」は、世界中から5千人以上のカップルが訪れる村の一大行事です。

村にあるレストランとブーランジェリー（パン屋）は日本人が経営しており、スタッフも全員日本人です。村唯一のレストラン「Au 14 Février」（日本語で「2月14日」の意味）はミシュラン1つ星を獲得した名店で、本場のフランス料理や、7月の七夕には寿司などの日本料理も振る舞われています。ヴァレンティン村は、実は日本にとてもなじみ深い村でした。

相良村職員が、現代の赤い糸である「インターネット」で運命的に出会ったヴァレンティン村は、相良村のまさにお手本となる「愛の村」でした。す



▲ヴァレンティン村唯一のレストラン「Au 14 Février」



▲ルッソー村長の相良村訪問

ぐに村職員は行動を起こしました。この「愛の村」と友好関係を築き、愛を軸に据えた村づくりを一緒に行いたい、と想いを込めた一通のメールをヴァレンティン村に送りました。

すると、すぐにヴァレンティン村から1通の返事がきました。日本の小さな村から送ったメールが、ヴァレンティン村のピエール・ルッソー村長に届き、共感を得ることができたのです。なんと1年後の2016年9月には、ルッソー村長の相良村訪問も実現しました。

相良村を訪れたルッソー村長は、食や伝統文化、茶畑、川などの自然景観にとっても感銘を受けた様子でした。

両村の「愛」が国をも動かす

その後、日仏両村の交流がスタートしました。「日本のセント・ヴァレンティン村」を目指す相良村は、ヴァレンティン村との交流記念として、ヴァレンティン村と同じ日に、ヴァレンティンデーを祝う「ヴァレンティン祭」を企画。住民や学生が企画する企画会議で準備を進め、イベント当日は県内外から多くの家族やカップルが来場し、たくさんの「愛」を感じる1日となりました。

また、この日をもって相良村は「セント・ヴァレンティン村在日事務所」として認められ、同村公認の訪問記念証や結婚証明書が発行できるようになったのです。

それからお互いの距離はさらに縮まり、姉妹都市締結に至るまでに時間は要しませんでした。外務省や総務省の



▲世界中からカップルが訪れるヴァレンティン祭



後押しも受け、2017年11月、パリ市内の在フランス日本国大使公邸において姉妹都市協定締結の調印に至りました。

調印式では、木寺昌人駐フランス日本国特命全権大使の立ち合いのもと、両村長は協定書に署名しました。

相良村の徳田正臣村長が「愛」というテーマの中で、さまざまな交流を通して、お互いの村民の幸福につなげたい」とあいさつをすると、ルッソー村長は「相良村の、お互いに分かり合うことを大事にするという考えに共感している。徳田村長と頑張っていきたい」と応えられました。また、木寺大使は「愛と相互理解がもたらした姉妹都市関係が、結婚生活のように喜びの中でも苦

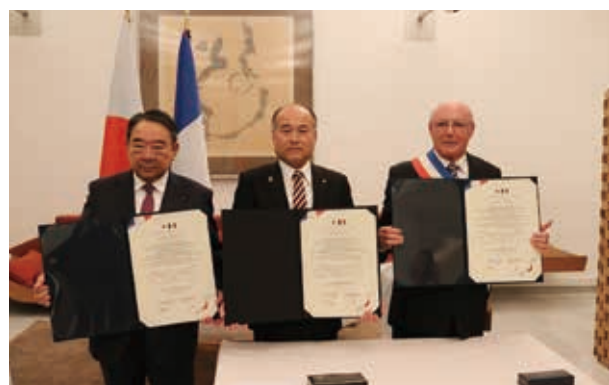
しみの中でも、長く良好に続いていくことを確信している」と祝福されました。

現代の赤い糸である「インターネット」が、遠く離れた両村をつなげ、さらに国を巻き込んだ大きな事業に発展しました。

世界の「愛の村」を目指して

「愛」というキーワードで結びついた2つの村。ヴァレンティン村と歩む相良村の物語はまだまだ始まったばかりです。

熊本県では、2020年の「東京オリンピック・パラリンピック」の開催を前に、ラグビーワールドカップ20



▲調印した協定書を掲げる木寺大使・徳田村長・ルッソー村長

19と女子ハンドボール世界選手権大会の2つの世界大会が開催されます。期間中、スポーツ関係者はもちろん、メディアや応援者など、世界中から多くの人が熊本に集まります。この絶好の機会を活かし、相良村への誘致企画を行うなど、ヒトの交流を推進し、子どもたちに夢を与え、将来世界で活躍する「グローバル（グローバル+ローカル）人財」の育成を目指します。

また、相良村には茶摘みや川遊び、いちご狩りなど魅力的な体験（コト）があるため、インバウンドを視野に入れた体験企画により、コトの交流も進めていきます。

モノの交流については、まずはヴァレンティン村のレストランを中心に相



▲相性が良くなる「夫婦橋」

良村の高品質な農林水産物を供給し、資産の価値向上を図ります。

そして両者のつなぎ役として、JETプログラムや地域おこし協力隊などを活用して、幸福のきっかけとなる村づくりを進め、村民の幸福度を向上させるとともに、豊かな村づくりにつなげたいと考えています。

相良村とヴァレンティン村の出来事は両国メディアの注目を集め、日本では全国紙を飾りました。認知度が向上した今、この歩みを止めてはなりません。「相性が良くなる村」が「愛あふれる村」に、そして「行ってみたい・住んでみたい村」へ。さらには「いつまでも住み続けたい村」になることを願って。

相良村長 徳田 正臣
(令和元年11月11日付第3101号)

▼法華嶽公園（法華嶽薬師寺境内）からの初日の出



地域資源を活かした取り組み 「ファイルドミュージアム創生事業」

国富町の沿革

国富町は、宮崎県のほぼ中央部に位置し、宮崎市から北西約16 kmに位置する豊かな緑に囲まれた田園都市です。

地形は、東西22 km、南北18 km、南東から北西にわたって本庄、飯盛、高田原、川上、薩摩原、六野原の台地が広がっています。それらの台地を縫って、本庄川、深年川、後川、三名川、北俣川の5つの河川が東流し、その流域の優良な農地では、温暖多雨の気候風土を活かした暖地農業が展開されています。

中でも本庄台地は、町の中心市街地を形成し、台地の上を東西に走る

宮崎県
国富町
くにとみちょう



▲スマートインターチェンジ（令和元年10月6日開通）

県道26号線沿いに、多くの住宅や店舗、学校、病院、行政機関などが立ち並んでいます。

また、令和元年10月6日には国富スマートインターチェンジが開通さ



れ、今後は高速移動の利便性が高まり、人流・物流の活性化が期待されています。

フィールドミュージアム構想

フィールドミュージアム構想とは、町全体を屋根のない博物館と捉え、地域に点在する歴史・文化・自然等の資源を来訪者が歩いて巡る博物館活動のことです。

地域住民自身が地域や自分たちの暮らしを知り、興味をもつことで、来訪者の参加を促し、まちづくりの核となるさまざまな取組によって、地域資源の整備・活用や地域の活性化、新たな環境保全の考え方につなげることを目的としています。

人口減少問題と地方創生

国富町の人口は、少子高齢化の進展により、2000年（平成12年）の22,367人をピークに減少し始め、2014年（平成26年）には、19,900人となり、ピーク時と比較して2,467人（△11.03%）減少していました。

こうした中、平成28年3月に人口減少問題に対応すべく「国富町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、政策目標や施策の基本的方向、具体的な施策をとりまとめました。また、隣接する宮崎市とも「広域連携中枢都市圏」を形成し、圏域全体の将来像を描き、経済・住民の暮らしの安定のため、構成する市町における役割分担を規定した連携協約を締結しました。

これらの中には、基本目標として「魅力ある価値の創出」を掲げ、交流人口の拡大や新たな観光回遊ルートづくりのため、地域資源を活かした観光開発、国富らしさを活かした取組を推進することとなりました。

フィールドミュージアム創生事業に取り組むきっかけ

「国富町まち・ひと・しごと創生総合戦略」や宮崎市との「広域連携中枢都市圏」構想に規定した「魅力ある価値の創出」を実現するためには何ができるかを考えたとき、国富町には、豊かな自然、そこで展開されてきた歴史、多様な農作物、特産品、工芸など、多様な産業が存在し、各

集落単位においては、石碑や水神、田の神などの有形資源に加え、祭事、伝承といった無形資源が、国富を知るためのストーリーを形づくっていることに気づきました。

フィールドミュージアムは、こうした多様な資源で構築される「国富らしさを体験する」ための観光プログラムであり、受け継がれてきた国富の暮らしを通じ、その風景の中に「国富らしさ」という価値を見出していく取組です。

また、その主体は地域住民であり、ある時は風景の中の一部としてその暮らしぶりを表現し、またある時は



▲生産量日本一のせんぎり大根

▶本庄稲荷神社夏祭りヨイマカ



語り部となって、ストーリーを町内外へと発信していくこととしてはどうかと考えました。

具体的な取組

最初に取り組んだのは、推進協議体の設立でした。国富町の将来にわたって持続的な取組に仕上げるには、将来を担う若者世代の参加が不可欠であることから、町内の若手商工会会員、農業経営者などと呼ばびか

古墳の点在する町並み



▲フィールドミュージアム町民参加のワークショップ

け、フィールドミュージアム構想を理解してもらうことから始めました。

その後、町民のみなさんに呼びかけワークショップを開催、「あなたが思う国富町の魅力は」というテーマで意見交換したところ、予想をはるかに上回る数百にも及ぶ埋もれた地域資源が提案されました。これをもとにストーリーの設定を行い、回遊ルートづくりを開始するとともに、町の魅力や歴史などを紹介してもらう「くにとみ史跡ガイドの会」の発足にも着手しました。

暮らしとともにある古墳群

国富町には、一般住宅や学校・神社の敷地内に県・町指定の古墳群が点在し、全国的にも珍しい市街地が形成されています。

これは、太古の昔から人々が古墳とともに暮らし続けてきた証であり、史跡や歴史を丁寧に守ってきた結果です。

しかし、町民の多くが日常生活の中に古墳が存在していることが当たり前で、その価値や意味に気づいて

いませんでした。

そのため、フィールドミュージアム推進会議では、平成29年3月、本庄稻荷神社に古くから伝わる伝統行事「初午大祭」に併せ、「国富体感ミステリーツアー（この町の謎を解き明かせ!）」を実施し、くにとみ史跡ガイドの会がメインキャストとなり、町内外の多くのみなさんに国富町の歴史や隠れた魅力、古墳に関する知識を広めるプログラムを実施しました。

はじめての取組であり、不安と期待の入り混じる中ではありましたが、予定していた参加者数を大きく上回り、途中で受付を終了するほどの大盛況で、参加者からも「国富に住んでいるが、初めて知った」、「国富町にとっても興味を持った」、「またこのようなプログラムを開催してほしい」などの声が寄せられ、国富町の魅力の発信に大いに貢献しました。

住民主導のまちづくりの気運の高まり

「国富体感ミステリーツアー」に引き続き、平成31年2月には「法華嶽満喫ミステリーツアー」を実施し、

町内にとどまらず、県外・海外のお客様にも訪れていただいたほか、中高生や一般ボランティアなど多くのスタッフの参加も実現しました。

また、このプログラムの実施の背景には、日本三大薬師のひとつである法華嶽薬師寺開山1300年大祭の実行委員会との連携がありました。

この実行委員会は、法華嶽薬師寺を中心とした地域活性化と歴史と文



▲フィールドミュージアムミステリーツアー

▲法華嶽薬師寺1300年大祭



国文祭・芸文祭みやざき 2020に向けて

現在国富町では、2020年11月に宮崎県で開催される第35回国民文化祭・みやざき2020に向け、国富町フィールドミュージアム創生事業を行うための準備作業を進めています。

本庄市街地に点在する古墳・史跡などを巡りながら、食や特産品にも触れていただき、国富町の魅力を満喫していただくプログラム構成を検討中です。

このプログラムでは、くにとみ史跡ガイドの会はもちろんですが、新たに国富町商工会にも加わっていただき、観光と物産、地域経済の活性化、交流人口の増加や関係人口創出につなげられればと考えています。

この取組が完成すれば、定期的な観光プログラムの開発につながるとともに、町内各地での資源開発並びにこれに携わる町民の裾野が広がるのが期待できるのではないかと考えています。

今後の展開

フィールドミュージアムの取組は、単なる観光プログラムの開発にとどまるものではなく、先人から受け継いできた地域資源を大切にしながら後世に継承していくという意義も含まれています。

国富町フィールドミュージアムのテーマは「国富景」を訪ねてく想い



▲ホッケストックミュージックフェスティバル



▲法華嶽公園キャンプ場（イベント時）

出の風景を切り取るように』です。そこで生まれ、そこに住む人たちにとっての想い出の風景こそが、町外に発信していくべき国富の魅力であると考えています。

今後は、こうした魅力に、多くの町民が気づくためのインナープロモーション（内的な広報展開）が重要であり、これにより郷土に誇りをもつ意識を醸成するとともに、「国富ブランド」の確立と「稼ぐ力」を高めていきたいと思っています。

国富町長 中別府 尚文
（令和2年1月27日付第3107号）

▼養殖サンゴ

農水産業と観光産業が融合する村 「サンゴの村宣言」プロジェクトで持続可能な むらづくり



恩納村の概要

恩納村は、県都那覇市より北に約50km、沖縄本島のほぼ中央部の西海岸側に位置し、西側は全域が沖縄海岸国定公園に指定され、東側は南北にわたり丘陵地（山林）となっており、豊かな自然に恵まれています。

村の人口は11,005人、世帯数は5,295世帯（2019年3月末現在）となっており、リゾート施設周辺の飲食店や関連産業の立地に伴い増加傾向で、沖縄科学技術大学院大学（OIST）やリゾートホテルの増加により外国人も増加している状況です。

風光明媚な自然に恵まれ、穏やかな環境とともに観光リゾート地として成長し、海岸沿いを中心に96件の宿泊施設が立地し、年間延べ294

沖縄県 恩納村

おんなそん



万2千人の観光客が宿泊しています。それに伴い、産業別就業者数も第三次産業の割合が多くなっています。

2012年には、世界最高水準の研究実施と人材輩出を目指す沖縄科学技術大学院大学が開学し、世界各



▲アーサ畑風景

国から約500人の学生・職員が従事しており、観光リゾート施設だけでなく、学術機能としてもグローバル化が進んでいます。

また、海ブドウ、モスク、アーサをはじめとする水産業、小ぎくを主力とする花卉類やパッションフルーツ、マンゴー、アテモヤなどの果樹類を中心とする農業なども盛んに行われています。特に、糸モスクや天皇杯を受賞した海ブドウの品質は高く、県外にも出荷されています。

2018年には村制施行110周年を迎え、SDGsによる持続可能な地域経済の活性化、地域の振興などを推進し、また、若者定住の促進、子育て環境の整備、教育環境の充実など地方創生の取組を推進しています。

文化情報センターの魅力

恩納村文化情報センターは、2015年4月に開館し、現在5年目を迎える図書館機能を備えた複合施設です。恩納村文化情報センターの特徴は観光情報を図書館サービスに取り入れた点にあり、特筆すべきは、入館者・貸出人数・貸出冊数ともに毎年増加しつづけていることです。1階には観光情報フロア、イベントや学習スペースに使える多目的ルーム、2階は海を見ながら読書ができる

自慢の海が広がる読書スペース



る図書情報フロア、3階が展望室となっています。また、既存の博物館と廊下で繋がっており、図書館・博物館が一体となった活動をしています。博物館の1階は村史編さん室となっていますので、博物館・村史編さん室と協力したレファレンス体制も整っています。

●観光フロア機能

観光情報フロアは観光客のニーズに応えるさまざまなコンテンツを用意しています。提供する情報には、事業者から寄せられるもののほか、住民と一緒に作り上げていくコンテンツ（キオクボード／キオクバンク）などもあり、観光情報誌には載らない写真や村の情報なども閲覧できます。

●図書館機能

図書情報フロアの閲覧室は、東シ

ナ海のコバルトブルーの海を眺めながら読書ができる眺望が特徴です。一般図書や児童図書、視聴覚資料のほか、郷土書を活用した観光情報を提供しています。村内のホテルに對しては団体貸出制度を活用したミニライブラリー事業も行い、村内の利用者のみならず、観光客も本を借りることが可能なため、県外の方の利用登録も多くなっています。

また、恩納村ならではの立地を活かしたイベントも好評です。

『サンセットウィーク』では「閉館時間は夕日が沈むとき」をキャッチフレーズに、通常平日19時、土日17時の閉館時間を「夕日が沈みきるまで」としています。夏場は20時ごろまで明るいので綺麗な夕日を楽しみながら普段より少しだけ長く滞在できるようになっていきます。『海辺のナイトシネマ』では文化情報センターの目の前、海のそばの遊歩道に大きなスクリーンを立てて映画上映会を行います。潮風のこちよさや海の匂いを感じながら夕焼けとともに映画を鑑賞します。また館内で楽器の演奏を楽しむ『ライブラリーコンサート』

ト』なども行っています。

●サンゴの村宣言関連の取組

後述する「サンゴの村宣言」と関連した事業として、サンゴの絵本作りやかるた作りにも取り組んでいます。サンゴに関する学習をセットにした講座で、出来上がった作品は製本や製品化することによって広く流通し、恩納村の取組を知っていただけでなく役に立っています。

文化情報センターで行う観光情報提供サービスの特徴は、単に観光客向けの情報を扱うのではなく、住民にとって有益な情報を観光客に提供



▶潮風を感じながら映画を楽しめる「海辺のナイトシネマ」

▲恩納村文化情報センター



するといつとにありますが。観光スポットや遊びの情報以外にも文化や歴史風土、芸能や文学などさまざまな角度から村や沖縄を知ってもらうことを心がけています。住民のために行うサービスが結果として観光サービスにもつながるというイメージです。

村の魅力を村民とともに発見し、情報を蓄積し、訪れる観光客に伝える情報センターとして、村の情報収集・情報発信拠点施設としての役割を担っています。

シンカプロジェクト

若い農業者の就農や遊休農地の有効活用など農業の新たな取組として、日本一のレタス産地である長野県川上村との農業技術交流によるレタス栽培「シンカプロジェクト」に取り組んでいます。恩納村を訪れていただいたみなさまに、地元産の安全・安心なレタスを提供し、おもてなしをしたいと考えています。

恩納村と長野県川上村とは30年来的交流があり、2016年度には友好姉妹都市提携を締結しました。川上村の夏場の気候と恩納村の冬場の気候が似ているため、レタスを通して農業技術交流ができないかと始まったのが「シンカプロジェクト」



▲レタス収穫体験をする子どもたち



▲イベントでレタス販売

です。「シンカ」とは、沖縄の方言で仲間を意味する「シンカヌチャー」に由来しています。これまで、恩納村ではパッションフルーツやアテモヤの果樹のほか、小ぎく、切葉、観葉の花卉類やサトウキビなどを栽培していました。レタス栽培は行っていないでしたが、レタス等の生鮮野菜を栽培することは、農地の有効活用や農業の効率化のために有効ですが、野菜栽培の技術や経験が少なく恩納村としては大きな課題でした。

まず始めに取り組んだのが土壌作ります。恩納村の土壌は沖縄県特有の赤土の酸性土壌であるため、野菜づくりには適していません。そこで、川上村シンカプロジェクト代表である、遠藤喜幸氏（川上村農家）の指導の下、土壌改良剤等を投入し試行

錯誤を重ね、レタス栽培に適した土壌までPH（6・5〜7・0）を調整することができました。次に、定植から出荷までの栽培を行っていく過程において、有害鳥獣であるタイワンシロガシラに食べられたり、糞を落とされたりする被害があったため、捕獲箱や風及び防鳥ネットを設置する対策を行ってきました。苗作りからレタス栽培工程等については、11〜2月の期間中、川上村から農家の方に来沖していただき、丁寧な技術指導により良品なレタスを栽培することに成功しました。

試験栽培を経て本格的に恩納村レタス研究会を立ち上げ、農家が栽培を開始してから3年目を迎えますが、徐々に秀品なレタスが安定的に栽培できるようになっています。今後の課題として、村内での地産地消が十分に浸透していない状況であるため、現在取引を行っている仲卸業者や量販店の協力を得ながら安定した販路を確保するとともに、リゾートホテル等地域で需要の高い生鮮野菜などの高付加価値品目への転換を図り、農業を活性化させたいと考えています。

サンゴの村宣言

本村の最大の特徴は、サンゴ礁海域をはじめとする恵まれた自然環境

キャラクター



名前：Sunna ちゃん

であり、この自然環境のあり方が本村の衰退に関わるといえます。しかし、近年はオニヒトデの大量発生、赤土等の流出、海水温の上昇によるサンゴ白化現象等により、サンゴ礁が減少している状況です。

そのため、村民一人ひとりの自然環境に対する意識の向上を図り、本村の豊かな自然環境の保存と育成を行い、地域資源を活かした「恩納ブランド」の確立に向けた「サンゴの村宣言」プロジェクトに取り組むこととしました。

2017年度から事業に取り組み、ロゴマーク・キャラクターの公募、キックオフイベントの開催、庁内プロジェクトチームや恩納村サンゴ礁保全再生活動地域協議会を設立し、2018年7月21日の「第35回うんなまつり」で宣言しました。セレモニーにはオリジナルキャラクターの「Sunna(さんな)ちゃん」が登場し、子どもたちと一緒にセレモニーを盛り上げました。



▲宣言セレモニーで子どもたちとSunnaちゃんがダンス

宣言に伴い、「サンゴのむらづくり」に向けた行動計画」を策定し、サンゴに関するオリジナルの絵本とかるたを作成、小中学校の総合的な学習の時間でのサンゴに関する学習・観察会の開催、3月5日のサンゴの日にはサンゴの苗植え付け・グリーンベルト植え付け・ビーチクリーンを実施し、村内外から多くの方が参加しました。

また、恩納村コープサンゴの森連絡会や日本UNEP協会とパートナーシップ協定を締結し、より一層の連携を図り、SDGsによるさまざまな取組が推進されるものと期待しています。



▲グリーンベルト植え付けの様子

今後の具体的な取組として、環境税(持続的なむらづくり推進税)、ローカル認証制度、Green Fins(グリーンフィンス)の導入など、観光・消費活動が環境保全につながる仕組みを導入し、自然環境負荷の小さな観光スタイルの創出や観光客への啓蒙を行い、本村の観光の高付加価値化・ブランディングに結びつくような有機的なつながりを構築していくこととしています。これにより一次産業から三次産業まで村民各々の個性に合わせた雇用を生むことができ、「誰ひとり取り残さない」村民全員参加型社会を実現し、住民が自己実現できるだけでなく、格差解消に向けた積極的な打ち手になると考

えています。

おわりに

現在の好調な観光産業により、恩納村は沖縄県を代表する観光リゾート地として発展し、多くの観光客で賑わいを見せている一方、少子高齢化が進み若年層の減少が顕著となっています。「サンゴの村宣言」プロジェクトにより、農水産業と観光産業が連携し、付加価値の高い雇用を生み、若者世代が住みやすく子育てしやすい、持続可能なサービスが集積したむらづくりを目指していきたいと考えています。

恩納村長 長浜善巳
(令和元年5月27日付第3081号)



▲「サンゴの村宣言」ロゴ

▼ひまわりまつりin北中城



女性長寿日本一と

世界遺産中城城跡の村

美^{ミス}きたなかぐすく

北中城村は、亜熱帯性気候、咲き誇るカラフルな花々、のどかな田園風景に囲まれ、女性の平均寿命89歳、女性長寿日本一の村です。全国平均寿命のランキングが5年に一度、厚生労働省から発表されますが、今回（2018年）も当村が女性長寿日本一に輝きました。15年、3回連続のトップとなり「長寿の村」として全国から注目されています。

北中城村は、那覇空港から北東へ16km、那覇から車で約40分の沖縄本島中部に位置します。周囲は沖縄市、宜野湾市、北谷町と市街化された市

沖縄県
北中城村

きたなかぐすくそん



町に隣接する一方で、世界遺産中城城跡を挟んで中城村に隣接しています。面積は11・5haで県内41市町村のうち5番目に小さな村ですが、人口は約17,000人で、今後は米軍跡地の土地区画整理事業が進むと約2,800人の増加が予想されています。

どこの地域にも「ミス〇〇」という地元の若い女性を起用したキャンペーンガールがいますが、当村では80歳以上の健康で明るい女性を「美^{ミス}きたなかぐすく」として毎年3人選出し、村の行事やPR事業で活躍してもらっています。時にはPR活動中でも買い物に熱中してしまうなどの愛嬌があり、また周囲もそれ

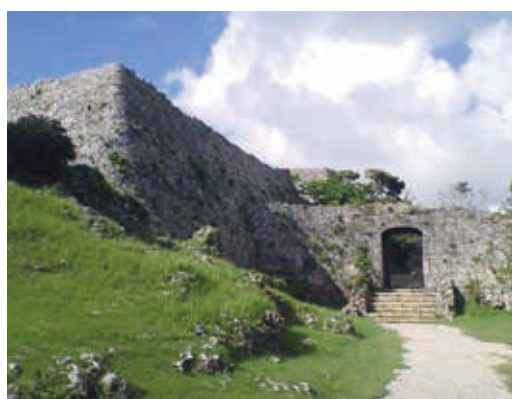


▲美寿きたなかぐすく交代式

らも笑って許してしまう南国のおおらかさがあります。

南国沖縄では、1月に桜が咲き、同時にヒマワリも咲きます。この時期に沖縄を訪れた方は、沖縄本島北部で「桜まつり」、当村で「ひまわりまつり」と、同時に2つの花まつりが味わえます。

味わうと言えば、アーサ。日本名では「ヒトエグサ」です。旧暦1月から3月の当村の海岸線沿いは、まるで緑の絨毯が敷かれたように鮮やかなグリーンに覆われます。アーサ麵、アーサスープ、アーサふりかけなど多様な加工商品も取り揃えており、アーサ収穫の拠点である熱田漁



▲標高約160mの丘の上に広がる中城城跡

港内にあるアンテナショップ「しおさい市場」で販売しています。海の空気を吸いたい方は、同ショップにて、アーサの沖縄風天ぷらなどご当地グルメが楽しめます。

世界遺産、文化遺産、 城ヨガ

沖縄においても、インバウンドと呼ばれる外国人観光客が急増し、2020年には那覇空港の第二滑走路が開港し航空機の離発着枠が大幅に増えます。また、沖縄本島東海岸の与那原・西原地区に大型MICEが計画され今後は、コンベンションが盛んになります。

当村では近隣の中城湾港にクルー

▲世界遺産で城ヨガ



ズ船が寄港し、近隣市町村と連携して受入れを行っています。当村の地方総合戦略の柱でもある観光振興を図り、これをいかに仕事へつなげていくかが今後の村行政の大きな課題です。

観光の目玉のひとつとなる中城城跡は、標高約160mの石灰岩丘陵上に築かれ、2000年には「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界文化遺産に登録されました。さらに2020年には、世界遺産登録20周年を迎えることから、文化関係者もイベントに向けて今から準備

を進めています。

史跡指定範囲は北中城村と中城村にまたがり、両村共同で管理運営しています。

城の創建年代は不明ですが、近年の発掘調査の成果からは、石積みによる築城は14世紀後半頃からと考えられています。城の郭（城壁などで区画した平場）は、梯子状に連なるように築かれており、1853年にアメリカのペリー提督率いる艦隊が来琉した際に、その築城技術の高さを賞賛し、当時の城の絵画や測量図を残しています。

その城跡の活用として、石積みの



▶青年エイサーまつり

城壁を正面に見据えた芝生のうえで、「城ヨガ」を2015年より開催しています。左に太平洋、右に東シナ海が見渡せるロケーションの下、朝日を浴びての朝ヨガ、月夜の明かりで満月ヨガを行っています。これまでに17回開催していますが、毎回100〜200人前後の参加者があり好評を得ています。「世界遺産」と「ヨガ」を組み合わせたコンテンツは、県外、外国人観光客からの反応も良く、今年には香港にて海外プロモーションも行いました。

また、毎年夏には、各自治会の若い青年たちを中心とした伝統芸能エイ



▲「歩きたくなる道500選」大城区

サーの演舞を観ることができる「青年エイサーまつり」も城跡で開催しています。

一方、城周辺の旧城下町には約280年前に建てられ、国指定重要文化財にもなっている上層農家の中村家住宅があります。奇跡的に沖縄戦の戦火を免れたこの住宅は室町時代の日本建築と中国建築様式を併せ持つ貴重な文化財であり、年間約2万6千人が訪れています。

中城城跡、中村家周辺の城下町、大城区は、豊かな水源に恵まれ「平成の名水100選」「歩きたくなる道500選」などに指定されており、のどかな町並みは、琉球王朝時代の雰囲気を残しています。

ゆつくりと歴史に触れたい方は中城城跡を中心に散策いただき、イベント・スポーツ・ショッピング等を楽しみたい方には、アワセゴルフ場跡地に建設された「イオンモール沖縄ライカム」を中心としたエリアをお薦めしています。

軍用地跡地に リゾートモール誕生

アワセゴルフ場は、沖縄戦後、米

軍に強制的に接収され、米軍のゴルフ場として利用されてきた場所です。2010年に返還され、土地区画整理事業による跡地開発で、イオンモール沖縄ライカムが建設されました。「ライカム」の名は、沖縄戦終結後、在琉米軍の統率・指揮を目的として置かれた「Ryukyu Command（琉球軍司令部）」の略称「Rycom」に由来します。戦後、この名残からライカム交差点（イオンモール沖縄ライカム西の交差点）や、ライカム坂などの俗称を持つ地名が残っています。

当イオンモールはリゾートモール



▲外人住宅カフェ

のコンセプトの基、外観は首里城をイメージし、吹き抜けの大空間には、容量100tを超える大水槽を備え、色鮮やかな熱帯魚など約25種1,000尾が回遊しています。開業1年で1,300万人の誘客実績を挙げています。

今秋には、イオンモールに隣接した村民体育館と民間スポーツクラブが完成します。文化・芸能・スポーツ・展示会等のイベントを開催して集客できるまちづくりを目指しています。

この他、村内には在日米軍の軍人やその家族のために建設された「外人住宅」をリノベーションした約30店の個性豊かなカフェが点在します。'60年代アメリカの雰囲気を残した外人住宅は、地元客、観光客からも人気があり、観光ガイドブックで「北中城カフェ」特集が組まれるほどです。

また若い女性を中心に、「Instagram」などのSNSで情報が拡散し、北中城村の重要な観光資源として認知されています。

訪れても安心な村に

アワセゴルフ場跡地開発のもう一



つの大きな目的は、災害時の大規模避難拠点とすることです。当地区は標高が約100mあり津波の心配はありません。地盤も強固な岩層です。2016年4月には当地に免震構造を有し、ヘリポートと最先端医療設備を備えた中部徳洲会病院が開院しました。当院は一階にトリアージに対応したスペースを確保し、災害時の医療拠点とした設計がされています。道路向かいのイオンモールには、食品・飲料・物資が大量に納品されています。イオンモールは東日本大

療チーム）の活動や物資の仕分けに、さらにその横に隣接する民間スポーツクラブではプールの水や浴室が役に立ちます。病院、イオンモール、村民体育館は道路の他に歩道橋も結ぶ複数動線を確保する計画です。これらの施設管理者と村とは基本協定を締結しており、今後は細かい協定内容を詰めていきます。

災害時のエネルギーの確保は、電力会社系列によりLNGサテライト施設が建設され、被災後3日間の燃料が常時備蓄されています。施設の

震災の教訓で天井からの落下物に配慮した設計がされています。4,000台の駐車場は救援部隊の前線基地に十分な広さがあります。隣接する村民体育館は、ボランティアやDMAT（災害派遣医療チーム）の活動や物資の仕分けに、さらにその横に隣接する民間スポーツクラブではプールの水や浴室が役に立ちます。病院、イオンモール、村民体育館は道路の他に歩道橋も結ぶ複数動線を確保する計画です。これらの施設管理者と村とは基本協定を締結しており、今後は細かい協定内容を詰めていきます。

村づくりの方向性

当村では開発により生活の利便を図り、賑わいを創出するエリアと、歴史を大切に保存するエリアに分けています。主に前者はイオンモールを中心としたアワセゴルフ場跡地、後者は中城城跡を中心とした地域です。当村の面積の14・2%を米軍基地が占めているため、返還された跡地をどう活用するかはとても重要な課題となります。

当村のもう一つの柱である農業は、現在生産額も営農者も減少し、耕作放棄地は増加している厳しい状況です。一方で、イオンモールのレストラン街から出る一日約1・5tの生ゴミは村内で処理しきれないことから村外へ費用をかけて搬出しています。村内に生ゴミの堆肥工場を建設し、耕作放棄地へ鋤込むことで農地の復活を図り、農地バンク制度により就農意欲のある者に農業を興して

もらうことを検討しています。また、堆肥化に伴うガスでの発電と熱の利用についても調査を進めています。将来的には、安全・安心な農作物を加工・販売し、新たな特産品を開発し、観光振興にもつなげたいと考えています。

村おこしには人材が必要で、当村では2016年度より地域おこし協力隊を受入れており、1人が農業振興に、5人が観光振興に活動しています。自治体も地方創生により、持続的発展に向けた競争社会に突入した今、人材の確保が重要となってきました。

おわりに

当村のように小さな自治体は、余程思い切った施策を打っていかないと埋没してしまうと考えています。よって、これからも積極的に攻めていく方針です。ぜひ注目いただき、機会があれば足を運んでいただけると幸いです。

北中城村長 新垣 邦男
(平成30年8月27日付第3051号)

MEMO

町村の施策事例集 VII 完全保存版

「魅力ある町村を実現するための様々な取り組み」

令和2年8月発行

編集・発行 全国町村会

〒100-0014 東京都千代田区永田町1-11-35

全国町村会館

魅力ある町村を実現するための様々な取り組み

町村の施策事例集

VII

完 全 保 存 版



移住・定住・交流人口促進、
地域コミュニティ・産官学金労官等との協働

教育・伝統文化・スポーツ、
少子・高齢化対策、子育て・医療・健康福祉

農林水産業振興、地域産業活性化、
企業連携・就業促進

自然環境対策・再生可能エネルギー、
災害防災対策・危機管理

観光振興、イベント(ご当地フェスタ・祭り)・
遺産(世界・日本)

全国町村会